

江豚沢Ⅱ

高瀬克範／編

江豚沢遺跡調査グループ／発行

2016

江豚沢Ⅱ

高瀬克範／編

江豚沢遺跡調査グループ／発行

2016

目次

例言／1

凡例／2

第1章 調査の目的と方法／3

第1節 江豚沢遺跡の概要と調査目的／3

第2節 江豚沢遺跡の立地／5

第3節 周辺の遺跡／6

第4節 発掘調査の方法と基本層序／8

第2章 検出された遺構／11

第1節 竪穴住居跡／11

第2節 土器／14

第3節 石器／18

第4節 土製品／21

第5節 大型植物遺体／21

第3章 まとめ／22

第1節 出土土器の年代的位置づけ／22

第2節 石器の使用痕分析／23

第3節 江豚沢遺跡の範囲と性格／24

第4節 花粉分析／25

引用・参考文献／28

Summary／30

写真図版／31

報告書抄録／42

図版目次

- 第1図 江豚沢遺跡の位置／3
- 第2図 江豚沢遺跡周辺の地質／5
- 第3図 江豚沢遺跡周辺の遺跡／6
- 第4図 江豚沢遺跡全体図／9
- 第5図 基本層序／10
- 第6図 包蔵地西側谷地形の層序および第7号竪穴
住居跡断面図／10
- 第7図 第5号竪穴住居跡／12
- 第8図 出土土器(1)(2010・2011年調査)／16
- 第9図 出土土器(2)(2010・2011年調査)／17
- 第10図 出土石器(2010・2011年調査)／19
- 第11図 出土土製品(2010・2011年調査)／21
- 第12図 使用痕が確認された石器／23
- 第13図 江豚沢遺跡における花粉分布図／26

表目次

- 第1表 出土石器一覧(2010・2011年調査)／20
- 第2表 分析試料一覧／25
- 第3表 産出花粉孢子一覧／26

写真図版目次

- 写真図版1／33
- 写真図版2／34
- 写真図版3／35
- 写真図版4／36
- 写真図版5／37
- 写真図版6／38
- 写真図版7／39
- 写真図版8／40
- 写真図版9／41

例言

1. 本書は、青森県むつ市奥内字竹立 4-1 ほかに所在する江豚沢（ふぐさわ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の青森県遺跡登録台帳の遺跡番号と、採用した遺跡略号は、次のとおりである。
青森県遺跡番号 208055
調査略号 FGS10 (2010 年)
FGS11 (2011 年)
3. 本遺跡の発掘調査・資料整理は、江豚沢遺跡調査グループが行った。
4. 本書所収の調査内容はすでに概報において公表してきているが〔高瀬・大坂（2011）、高瀬（2012）〕、内容に齟齬がある場合は本書の記載が優先する。
5. 野外調査の期間、調査面積、調査主体は次のとおりである。ただし、2 年間の調査範囲の一部は重複している。
【野外調査期間・調査面積】
2010 年 9 月 6 日～9 月 14 日 調査面積約 87㎡
2011 年 8 月 9 日～8 月 16 日 調査面積約 8㎡
【調査主体】
2010 年 明治大学文学部考古学専攻(発掘担当者：高瀬克範)
2011 年 北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座(発掘担当者：高瀬克範)
6. 本書は、高瀬克範が編集した。執筆者名は、文末に明記した。
7. 本書掲載の図面は、地図・遺構関係を高瀬克範、土器の拓本・実測・トレースを高瀬克範・大坂拓、土製品の拓本・実測・トレースを大坂拓、石器実測を岩瀬彬、石器トレースを高瀬克範が担当した。
8. 発掘調査の参加者は下記の通りである（所属は当時）。
【2010 年】高瀬克範（明治大学）、大坂 拓（明治大学大学院文学研究科学生）、田村有希・楨原史絵・鈴木佳子・狩野靖子・小田和也・林 直弘・土井翔平・吉村幸広（明治大学文学部学生）
【2011 年】高瀬克範（北海道大学）、勢村茉莉子（北海道大学大学院文学研究科学生）、勝木麗華（北海道大学文学部学生）、根岸 洋・中澤寛将（青森県教育委員会）、大坂 拓（宮城県教育委員会）
9. 発掘調査および報告書の執筆にあたり、上記調査

参加者とともに、下記の方々と機関にお世話になった（五十音順、敬称略）。

青森県教育委員会、安達香織、石川日出志、岩瀬彬、日下和寿、片野ゆうみ、工藤せつ、坂本朋子、坂本望生、桜井はるえ、福田正宏、むつ市教育委員会生涯学習課、村木 淳、森田賢司。

このほか、國木田大氏・吉田邦夫氏には木炭の放射性炭素年代測定を実施して頂いた。記して感謝申し上げる。

本書にかかわる調査・研究は、2010 年度明治大学人文科学研究所個人研究第 1 種（研究代表者：高瀬克範）、2010 年度文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（研究代表者：吉村武彦）、2015 年度科学研究費補助金（15H01899、研究代表者：高瀬克範）による支援を受けて実施されたものである。

10. 本書にかかわる出土遺物・図面類は、むつ市教育委員会が保管している。

凡例

1. 層名の記載，土層注記の方法は第1章第4節第4項のとおりである。
2. 遺構実測図における高さは，標高を使用した。
3. 本書で使用している地形図は，国土地理院発行二万五千分の一地形図「近川」である。
4. 基準点の座標（緯度，経度，世界測地系）は下記の通りである。
A点(08-15 杭から設定グリッド沿いに北側へ2 m)
41° 11′ 46.93104″ 141° 16′ 32.49295″
B点(08-14 杭) 41° 11′ 46.73671″ 141° 16′ 32.49679″
C点(04-14 杭) 41° 11′ 46.72894″ 141° 16′ 31.81019″
5. 遺物の掲載基準 本書に図示した遺物の掲載基準は以下の通りである。
【土器】遺構出土・表土出土にかかわらず，型式論的に時期が判別できるものを選定し掲載した。
【土製品】すべて図示した〔表土（I層）出土の資料も含む〕。
【剥片石器】遺構出土のツール・二次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片をすべて図示した。なお，本書でいうスクレイパーは，剥片の一箇所以上の縁辺に連続的な二次加工が加えられている，尖頭部が作出されていない剥片石器を意味する。また，剥片と碎片については，最大長もしくは最大幅が10 mm 以上のものを剥片，10 mm 未満のものを碎片として分類した。
【礫石器】遺構出土のツールをすべて掲載した。

第1章 調査の目的と方法

第1節 江豚沢遺跡の概要と調査目的

江豚沢（ふぐさわ）遺跡（北緯 $41^{\circ} 11'46''$ ，東経 $141^{\circ} 16'32''$ ）は，青森県むつ市の市街地から南へ約 12 km 離れた近川集落の西北側，むつ市奥内字竹立 4-1 ほかにも所在する（第1図）。本遺跡は，1950 年に中島全二によって注意され，同氏の採集土器を江坂輝弥（1953）が大洞 A' 式として紹介したのが文献上の初出である。1952 年には，江坂によって基本層序や遺物の散布状況などの調査がおこなわれ，翌年にはさらなる調査の計画もあったようであるが，詳細については明らかにされていない。本遺跡の本格的な発掘調査は，下北史談会の橘善光・山本一雄らによって 1966 年に実施された（橘・山本 1967）。「下北半島の大洞 A' 式の文化内容」の究明が調査目的となっていることからみると，本遺跡からは縄文時代終末期の土器がまとまって出土することが重視されていたことがわかる。その後，工藤竹久（1987），橘（1994），福田（2000），齋藤・福田（2003），大坂（2009a）らが，本州島北端域の縄文時代終末期とその直後の土器について編年的考察を行ってきたが，いずれの研究者も本遺跡出土土器を下北半島における代表的かつ重要な資料として扱ってきている。

高瀬らは，1) 本遺跡の 1966 年調査資料をもとに設定された「江豚沢式」の内容や数値年代，2) 当時の生業形態，3) 集落の内容を明らかにすることを目的として，2003 年から試掘・発掘調査を継続的に実施した。その結果，少なくとも 7 棟の竪穴住居跡が存在することが確認され，出土遺物の大半が大洞 A' 式とその直後の型式にほぼ収まることが明らかになった。このうち，2009 年までに調査が終了した第 1・2・4・6 号竪穴住居跡とその周辺における発掘の成果については，2012 年に刊行した報告書『江豚沢 I』（高瀬編 2012）において公表した。

本書は，その後におこなわれた 2010・2011 年の調査結果の報告書である。この 2 カ年における調査は 2003～2009 年に実施した発掘の補足的な意味を有するが，目的は以下の 3 点に要約される。第 1 は，これまでの試掘調査において包蔵地西側に存在することが確認されていた遺構もしくは谷地形を埋積し

ていると考えられる堆積物のひろがり把握する点である。その際，以下のような方針をあらかじめ設定した。かりに人工的な遺構が認められた場合には検出のみにとどめるが，谷地形と判断された場合はその内部を掘削して地山まで掘りぬき，深さ・規模を明らかにする。第 2 の目的は，2003 年の試掘坑（T07-10）で存在が確認されていた第 7 号竪穴住居跡の規模と埋土の状況を確認する点である。第 3 の目的は，第 4 号竪穴住居跡の西北に隣接する第 5 号住居跡の規模・付帯施設・時期についての情報をえる点である。

上記の目的を達成するため，2010 年度は 04-12，04-15，05-12，05-13 グリッドの表土除去を行ない，第 5 号竪穴住居の検出・発掘を行なった。また，R08-11 から R02-11 グリッドにかけて，東西方向の長さ 23m，幅 1m のトレンチを設定したうえで表土を除去し，黒褐色堆積物のひろがり把握すること



第1図 江豚沢遺跡の位置（国土地理院発行二万五千分の一地形図「近川」を使用して作成）

とした。また、2011年度は04-13グリッド北側から05-13グリッド北側に幅1mのトレンチをもうけ、トレンチ内にかぎって第5号竪穴住居跡の床面まで掘削を行った。

(高瀬克範)

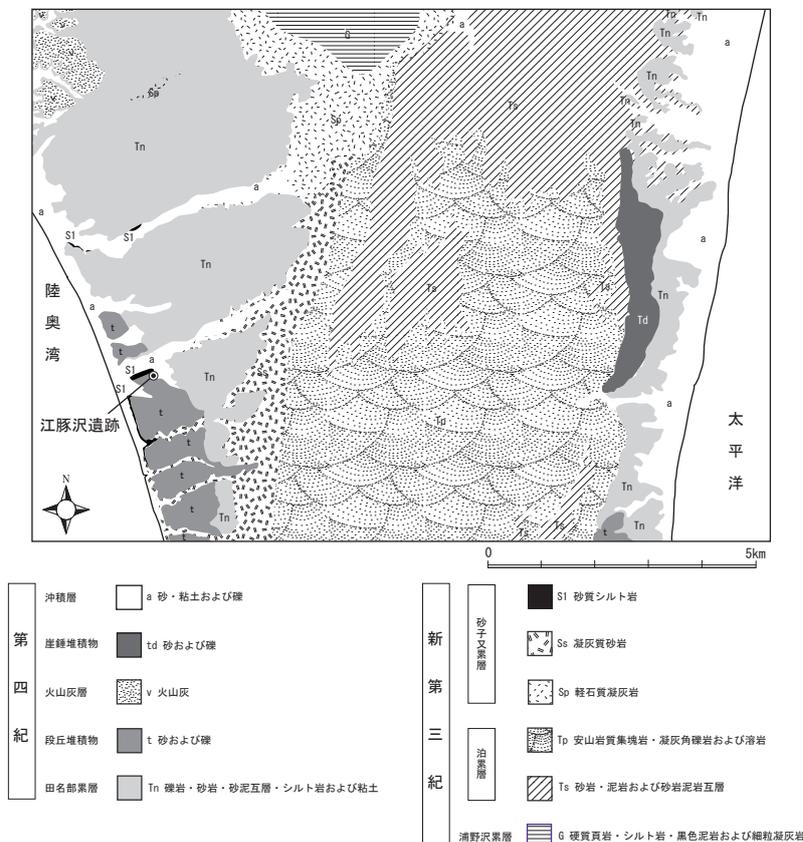
第2節 江豚沢遺跡の立地

江豚沢遺跡は、奥内川と近川に挟まれた「近川台地」の北側縁辺部に立地しており（第2図）、現況は畑・荒地・植林地などとなっている。「鉞」の形にたとえられる下北半島のうち、「刃」の部分にあたる平館海峡に面した「半島西部」は急峻な山地であり、おもに新第三紀層（前・中期中新世）のグリーンタフが分布している。この山地の東北部から半島東端まで、第四紀火山である恐山・燧岳火山が第三紀層を基盤として噴出している。燧岳の活動史については不明な部分が多いが、恐山の火山活動は、中期更新世後半まで活発であったことがわかっている。

いっぽう、「鉞」の「柄」に相当する部分には、下北丘陵とよばれる標高 500 m 以下の低い山地・丘陵がみられ、それを取り囲むように河岸段丘が陸奥湾側・太平洋側の双方にひろく分布している。山地・丘陵は、中生代の石灰岩を基盤とし、後期中新世～鮮新世の堆積岩および火砕岩で構成される。段丘は新しいものほど外側に形成されており、段丘構成層の特徴と被覆テフラの層序をもとに段丘の対比が行われている。

山崎（2001）によれば、酸素同位体ステージ9においては現在の横浜町から野辺地町の付近に丘陵頂面があり、ここが西部山地とともにふたつの島となっていたことが推定されている。また、ステージ7の段丘は小川原湖から尾鮫沼にかけて発達するほか、むつ市街地北部などにわずかに分布している。さらに、ステージ5dに洞爺カルデラから噴出した大容積テフラである洞爺テフラ（Toya, 11.2～11.5万年前）を風成で載せる段丘面（mT5e）が、断続的ではあるが半島の「柄」部の広い範囲を取り囲んでいることが明らかにされている。ただし、この時期に形成された段丘は、大間付近をのぞけば比較的小規模で幅も狭い。

江豚沢遺跡は、ステージ5eに形成されたとされるこの海成段丘上に立地している。包蔵地の範囲は、台地上の平坦面から奥内川とその支谷にむかって北側に傾斜する面を含んでいる。西側にはさらに小さな谷地形がみられ、発掘調査範囲の標高はおおよそ 20.0～20.5 m である。（高瀬克範）



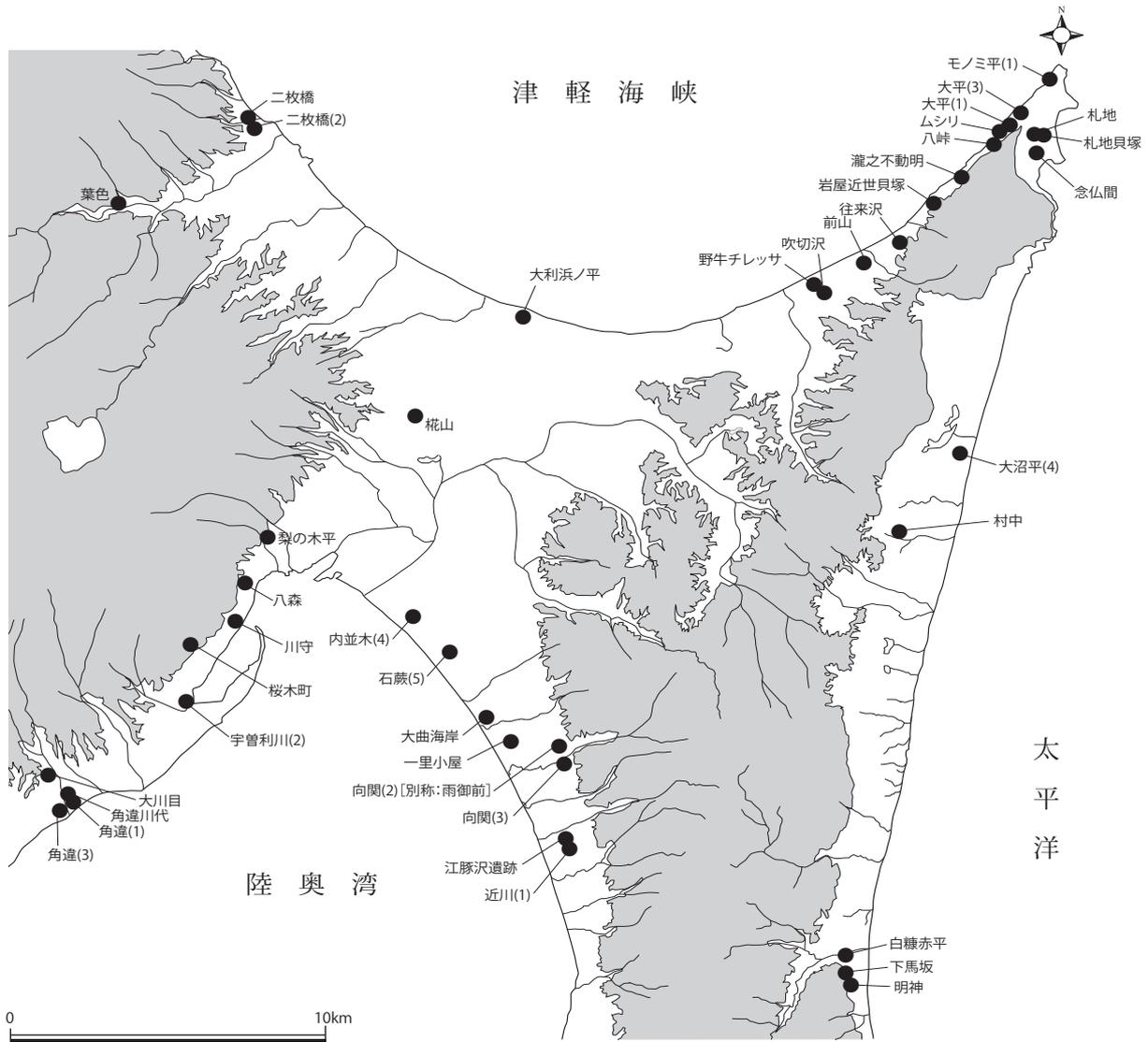
第2図 江豚沢遺跡周辺の地質 [地質調査所（1961）をもとに作成]

第3節 周辺の遺跡

むつ市域では、180カ所以上の包蔵地（遺跡）が知られている。そのうち、縄文文化晩期から弥生文化の遺跡は、江豚沢遺跡をふくめて1990年代までに14遺跡が確認されていた（橋1994、青森県教育委員会1998）。その多くが、下北半島の山地・丘陵に端を発し、陸奥湾・津軽海峡に注ぐ河川中・下流域に集中している。ここでは、その後に確認された遺跡もふくめて、江豚沢遺跡近隣の縄文文化晩期～弥生文化の遺跡について簡単に紹介する（第3図）。

縄文文化晩期前葉～中葉の遺跡は、大川目川流域および大湊港に面した海岸段丘上に分布する。大川目川河口付近の角違（3）遺跡では大洞B～BC式が（成田ほか1988）、大湊港に面した海岸段丘上の八森

遺跡では大洞B～C1式土器や頭部がハート形を呈する土偶、石棒などが出土している（橋1951、1952、1994）。このほか、大湊旧海軍用地内では大洞B～BC式土器やカール状に結髪した土偶が出土する遺跡の存在が知られているが（橋1994）、遺跡の正確な位置など詳細は不明となっている。このほか縄文時代晩期に帰属する遺跡としては、大湊港に面した海岸段丘上の桜木町、川守、今泉川左岸の向関（3）、宇曾利川下流の宇曾利川（2）、早掛沼の北方2kmの椛山、江豚沢遺跡にもほど近い近川（1）、尻屋崎方面の野牛チレッサ、吹切沢、八峠、ムシリ、大平（1）、札地、札地貝塚、太平洋側の村中・下馬坂・明神遺跡が知られている。



第3図 江豚沢遺跡周辺の遺跡 [斎藤（2004）、青森県教育委員会（1998）をもとに作成]

縄文文化晩期後葉～弥生文化前期の遺跡としては、江豚沢遺跡のほか大川目川流域、小荒川流域などに分布している。しかしながら、江豚沢遺跡に並行する時期の遺跡は、江豚沢の半径 2.5 km 以内では見つかっていない。大川目川中流の大川目遺跡は発掘調査が行われており、大洞 A' 式並行～砂沢式並行の土器と石棒、土偶、土版が出土している（橘 1979）。同河川の下流の角違川代遺跡でも、ほぼ同じ時期の土器が多数採集されている（橘 1987）。小荒川中流の梨の木平遺跡では 3 次にわたる発掘調査が行われており（橘・奈良 1986, 橘・佐藤 1988, 1990）、大洞 A' 式並行～砂沢式並行にかけての大量の土器にくわえ、石棒や土偶なども出土している。土器には、「畿内第 I 様式類似土器」（橘・佐藤 1988, p. 148）と報告された小破片も含まれている。同時期の土器は、雨御前遺跡とも称される今泉川の右岸に向関（2）遺跡でも見つかっており（橘 1987）、大川目川下流の角違（1）遺跡も同様の時期に属すると考えられている。

弥生文化中・後期の遺跡は、大川目川、宇曾利川、赤川周辺域、大畑川、尻屋崎周辺、下北半島太平洋側などで確認されている。二枚橋（須藤 1970）、二枚橋（2）（大畑町教育委員会 2001）遺跡は、縄文晩期～弥生中期の遺物が大量に出土した下北半島の代表的な遺跡である。葉色遺跡（小山 2007）でも、弥生時代前期～中期初頭に位置づけられる竪穴住居が検出されている。大川目川流域では、角違（3）で中期初頭の壺の小破片が遺構外から出土しているほか（成田ほか 1988）、角違川代遺跡で中期初頭、大川目遺跡で中期後葉の土器が採集されている（橘 1975, 1987）。向関（2）遺跡では、二枚橋式及び念仏間式に比定できる土器が見つかっているほか（橘 1987, 1995）、陸奥湾沿岸の砂浜低地にある大曲海岸遺跡で中期後半の完形壺が（鈴木 1978）、大曲海岸遺跡にほど近い一里小屋遺跡でも同時期の小破片が採集されている（橘 1988）。そのほか、宇曾利川（2）遺跡は弥生中期に帰属すると目されており、正確な位置は未詳であるものの、市内浜関根・大室平・金谷沢各地区、近川に架かる近川橋の周辺で中期の土器が採集されている（橘 1988, 1995）。

また近年では、大利浜ノ平、前山、往来沢、岩屋近世貝塚（東通村教育委員会 2003）、瀧之不動明（東通村教育委員会 2003）、大平（3）、モノミ平、大沼平（4）、白糠赤平、明神などの東通村域内の状況も徐々

に明らかになりつつあり、下北半島北半部では弥生中期後半～後期の遺跡数は、弥生前期・中期前半までと比べると増加する傾向が明確になりつつある。

（高瀬克範）

第4節 発掘調査の方法と基本層序

1. 調査区の設定と調査経過

調査区は第4図に示したように設定した4mグリッドを用いた。

2. 遺構の精査と遺物の取り上げ

遺構を検出してプランを確定したのち、埋土を層位ごとに掘削した。遺構は平面と断面を記録し、検出・断面・完掘状況で写真撮影をおこなった。写真撮影には1800万画素以上のデジタル一眼レフカメラをもちいた。遺物はすべて、遺構と層位を記録してとりあげた。遺構内で集中して遺物が出土した場合や年代測定用のサンプル採取位置などは、遺構実測図を作成したうえでX・Y・Z値の記録も行った。

3. 遺構内土壌の採取とフローテーション

微細自然遺物の回収を目的としてフローテーションを行った。土壌サンプルの採取には遺構精査時に25cm×38cmのビニール袋をもちいた。サンプルの採取位置と容量は以下の通りである。

第5号竪穴住居跡1層 1.0リットル

第5号竪穴住居跡2層 0.8リットル

4. 基本層序

(1) 土層の注記方法

- 色『新版標準土色帳』(小山・竹原1967)にしたがった。
- 土性肉眼での観察および自らの接触・掘削にもとづき、構成物質の土砂の粒径を粗砂(2.0～0.2mm)、細砂(0.2～0.02mm)、シルト(0.02～0.002mm)、粘土(0.002mm以下)を目安として区分した。シルトのなかでも粒径が大きい場合は、「砂質シルト」とした。
- 粘性強、やや強、中、やや弱、弱の5段階に区分した。
- しまり強、やや強、中、やや弱、弱の5段階に区分した。
- 混入物など土性がことなるブロック、炭化物・焼土粒・動物骨・礫などの混入物を記載した。混入物の大きさは、最大粒径をしめす。混入量は、「ごく微量」が2%以下、「微量」が5%以下、「少量」が10%以下、「やや多量」が25%以下、「多量」が50%以下である。混入土の視覚的な目安は土色

帳を参考にした。また、混入物の起源が明確な場合には、その層名も記載した。

(2) 層名の記載

- 基本層序自然堆積層および耕作土は、ローマ数字で新しい方からI, II, III…と命名した。
- 遺構遺物捨て場をふくむ遺構埋土は、アラビア数字で新しい方から1, 2, 3…と命名した。
- 層位の細分の必要が生じた場合は、自然堆積・遺構埋土を問わず小文字のアルファベットを付記してIa・Ib, 3a・3b…のように記載した。

(3) 基本層序

本遺跡の基本層序は次のとおりである(第5図)。

I層：10YR3/2 黒褐色砂質シルト粘性中しまりやや弱耕作土径2～5mm程度の「ローム」粒を少量ふくむ。標高がより低くなる包蔵地西側では下部に鋤床が見られる箇所もある。層厚は約20～50cm。

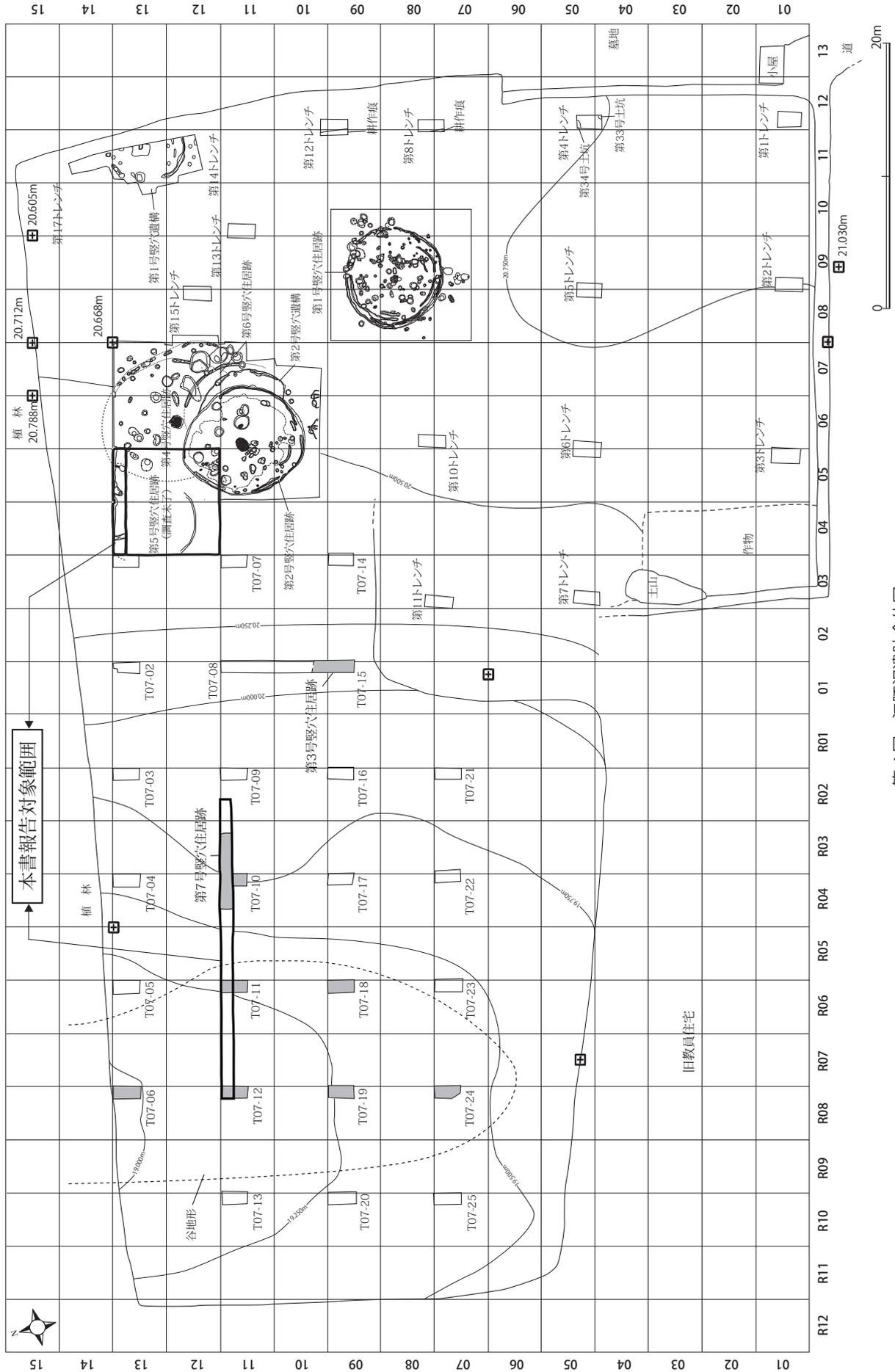
II層：7.5YR4/4 褐色砂質シルト粘性やや弱しまり中漸移層径1～3mm程度の「ローム」粒を微量にふくむ。一部土壌化している。層厚は約5～30cm。しばしばI層に削剥され、残存していない。包蔵地の南側で保存状況が良好。

III層：7.5YR4/6 褐色砂質シルト粘性やや強しまりやや強「ローム」層。層厚は30cm以上。

(4) 包蔵地西側谷部の基本層序(第6図)

包蔵地西側に設定したトレンチの表土除去により、その直下に黒褐色土が分布していることが確認された。竪穴住居の埋土に性状が非常に類似してはいるものの、分布範囲の規模・形状から人為的に掘削された遺構である積極的な根拠はなく、谷地形を埋める堆積物であると判断された。谷を埋める堆積物は、R08-11グリッドからR05-11グリッドまで幅が約10mの範囲に認められた。第1章第1節の調査方針にしたがい、トレンチ内でもっとも厚く堆積しているトレンチ西端において内部の掘削をすすめたところ、表土から深さ85cmほどで地山である「ローム」層に達した(第6図)。

この谷地形は、さらに西側に分布していることは



第4図 江豚沢遺跡全体図

確実であるが、植林のため R08 グリッドよりも西側については調査することができなかった。しかしながら、2007年の試掘トレンチ T07-13, T07-20, T07-25 (高瀬編 2008) では表土直下に黒褐色土は分布していない (第4図)。したがって、谷地形の西側の限界は R08 と T10 のあいだに存在していると考えられ、現状では第4図に点線で引いた範囲が比較的小規模な谷地形のおおまかな範囲と判断できる。谷地形内部の堆積層は、以下の3層に区分された。
 谷1層：10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強 径2mm～5mm程度の「ローム」粒をごく微量に含む。
 谷2層：5YR3/2 オリーブ黒 砂質シルト 粘性中 しまり中 径2mm～5mm程度の「ローム」粒をごく微量に含む。

谷3層：2.5YR3/2 黒褐色 砂質シルト 粘性やや強 しまり中。

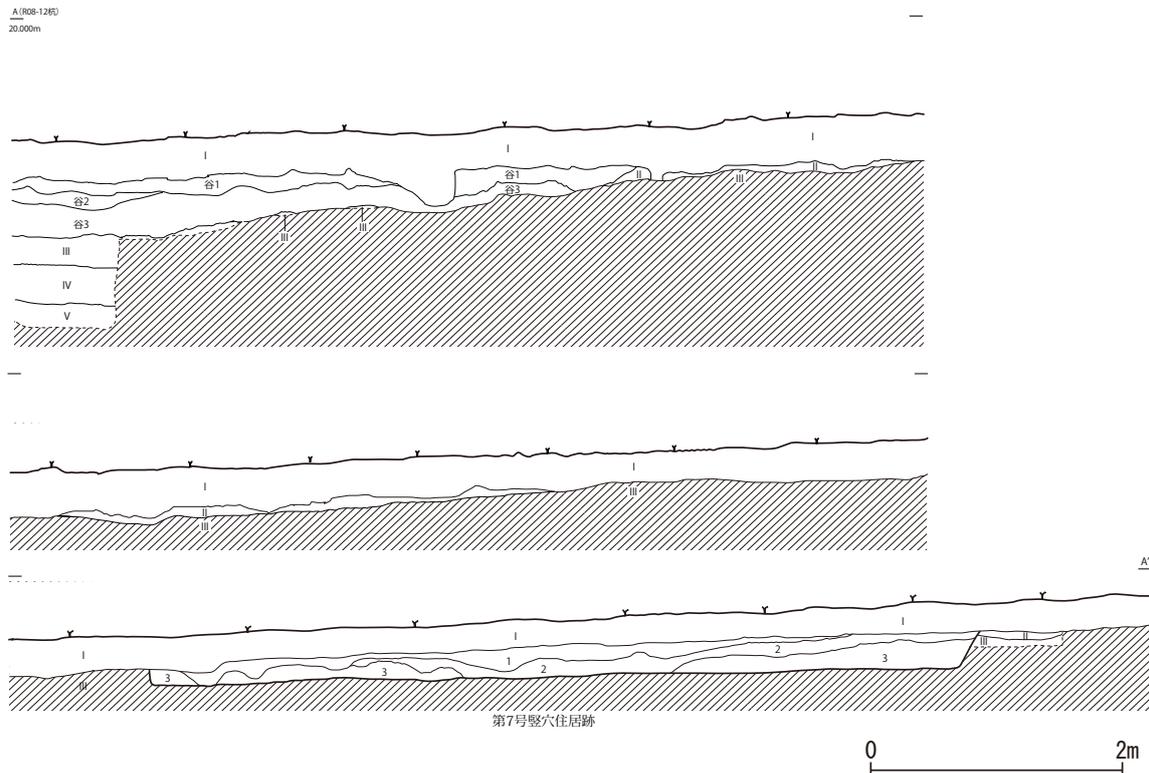
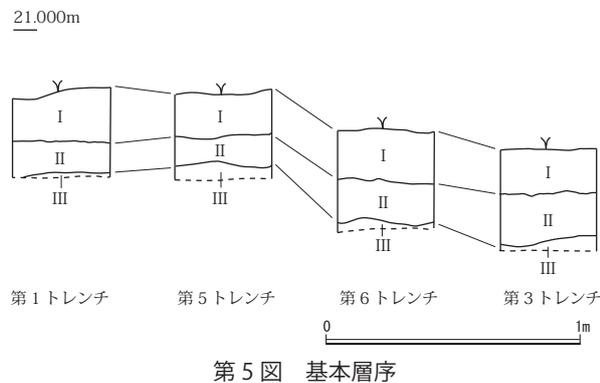
トレンチ内においては、谷地形内からの遺物の出土はみられなかった。トレンチ西端部では他に地形の下位の掘削もすすめ、表土から1m55cmまで「ローム」層を除去した (写真図版 1-1)。調査の結果、上述の基本層序の下位の自然堆積層 (IV, V層) について、以下のような所見をえた。

IV層：10YR5/3 にぶい黄褐色 砂質シルト 粘性強 しまり強 「ローム」層。

V層：7.5YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性強 しまり強 「ローム」層。

本遺跡が立地する mT5e の段丘面は、洞爺テフラ (Toya, 11.2～11.5年前) を風成で載せることが知られているが (山崎 2001)、今回の調査では Toya を確認することはできなかった。谷地形の最下面からさらに15cm下位の明らかに「ローム」中から、炭化物を採取した。國木田大氏・吉田邦夫氏 (東京大学) による放射性炭素年代測定結果 (AMS法) は、3685 ± 35BP (TKa-15354) であった。野外調査時においては炭化物の周囲に木の根などの痕跡は確認できなかったが、現状では、何らかの原因によって「ローム」層中に入り込んだ後世の炭化物である可能性が高い。

(高瀬克範)



第6図 包蔵地西側谷地形の層序および第7号竪穴住居跡断面図 (R02-12～R09-12ライン)

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居跡

1. 第4号竪穴住居跡（拡張後）（第4・7図）

耕作により埋土の多くが失われており、大部分が他の住居跡に切られている竪穴住居跡である。2009年にほぼ発掘済みであるが、トレンチ内の北側の断面観察で遺構の西側部分を確認した。

〈位置〉05-12, 05-13, 06-12, 06-13, 07-11, 07-12, 07-13区。

〈平面形〉不整楕円形になる可能性があるが、詳細は不明。

〈規模〉不明であるが、直径10m以上になると推定される。

〈重複関係〉第2号竪穴住居跡, 第2号竪穴遺構, 第4号竪穴住居跡 pp.12, 13, 14, 17, 21, 34, 35, 36に切られる。第5号竪穴住居跡を切る。

〈検出面〉I層直下, II・III層中。

〈掘込面〉耕作による削剥を受けている。

〈埋土〉

1層: 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 径5mm～3cm程度の「ローム」粒・炭化物粒・焼土粒を少量含む。

〈柱穴および付属・重複土坑(pp)〉

明確に柱穴と判断できる土坑はないが、竪穴住居跡と切り合い関係をもつ以下の土坑(pp)が検出された。
[pp34] 1層: 7.5YR4/3 褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径5mm程度の炭化物粒をごく微量に含む。

[pp35] 1層: 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強 径2mm～5mm程度の炭化物粒を微量に含む。

2. 第5号竪穴住居跡（第4・7図）

2008年の調査(高瀬編2009)において確認された、第2号竪穴住居跡の西北部, 第4・6号竪穴住居跡の西部に位置する竪穴住居跡である。第2号竪穴住居跡の西北, 第4・6号竪穴住居跡の西に位置する竪穴住居跡である。A-B, C-D, E-Fの3本のベルトを設定し, A-Bベルトの西側のみを床面まで掘りさげしたが, 半分以上が未発掘である。

〈位置〉04-12, 04-13, 05-12, 05-13区。このほか,

発掘調査は行っていないが, 03-12, 03-13, 04-14, 05-14区にも分布する可能性がきわめて高い。

〈平面形〉全体を検出していないが, 不整楕円形もしくは卵形と推定される。

〈規模〉調査を終了していないため不明。推定される規模は, 長径・短径ともに8mをこえる。

〈重複関係〉第4号竪穴住居跡, 第4号竪穴住居跡 pp.18, pp.19に切られる。第5号竪穴住居跡 pp.4, pp.5, pp.6, pp.7に切られる。

〈検出面〉I層直下, II・III層中。

〈掘込面〉耕作による削剥を受けている。

〈埋土〉

1層: 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性弱 しまりやや強 径2mm～5mm程度の炭化物粒・「ローム」粒を微量に含む。

2層: 10YR3/4 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中 径2cm～5cm程度の暗褐色土(7.5YR3/3)をブロック状にやや多量に含む。

3層: 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性中 しまりやや強 径2cm～10cm程度の暗褐色土(7.5YR4/3)をブロック状にやや多量に含む。径5mm程度の炭化物粒を微量に含む。

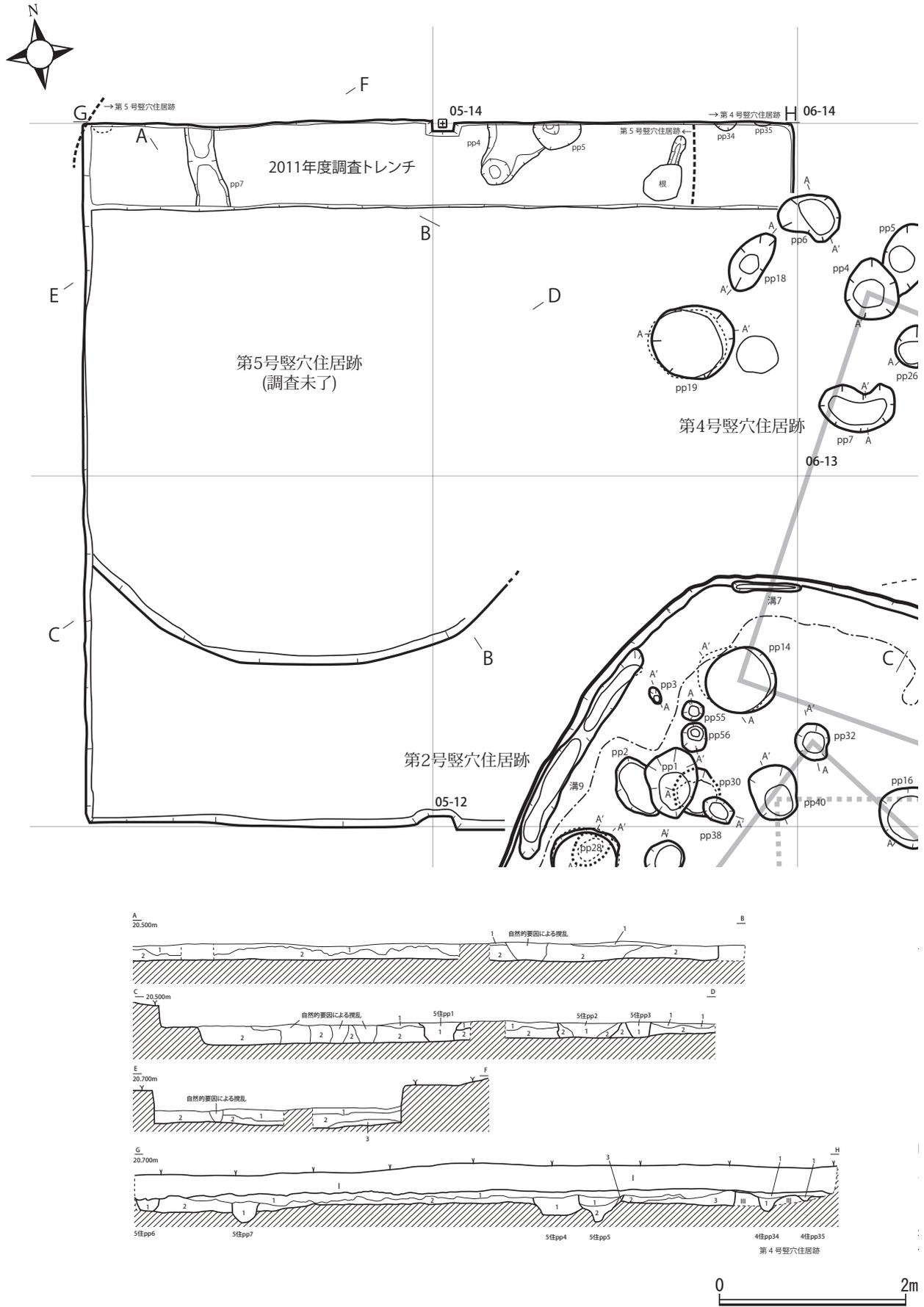
貼床: 10YR4/6 褐色 砂質シルト 粘性中 しまり強 径2cm～10cm程度の暗褐色土(10YR4/6)をブロック状に多量に含む。

〈柱穴および付属・重複土坑(pp)〉

明確に柱穴と判断できる土坑はないが、竪穴住居跡と切り合い関係をもつ以下の土坑(pp)が検出された。
[pp1] 表土直下, 1層中で検出した。1層: 7.5YR2/2 黒褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 径1cm～2cm程度の「ローム」粒をごく微量に含む。

[pp2] 表土直下, 1層中で検出した。1層: 7.5YR1.7/1 黒色 砂質シルト 粘性やや強 しまりやや強 径3cm～5cm程度の「ローム」粒をブロック状に少量に含む。2層: 7.5YR3/1 黒褐色 砂質シルト 粘性中 しまり中 径3cm～5cm程度の「ローム」をやや多量に含む。

[pp3] 表土直下, 1層中で検出した。1層: 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 粘性やや弱 しまり中



第7図 第5号竪穴住居跡

まりやや弱 径1cm～2cm程度の「ローム」粒を微量に含む。

[pp4] 2層上面で検出した。1層：10YR4/4 褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 径5mm～1cm程度の「ローム」粒および炭化物を微量に含む。

[pp5] 2層上面で検出した。1層：10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径3mm程度の炭化物粒を微量に含む。2層：10YR2/3 黒褐色砂質シルト 粘性弱 しまりやや弱 径5mm～1cm程度の炭化物粒を微量に含む。3層：10YR4/4 褐色砂質シルト やや強 しまりやや強 径5mm～1cm程度の「ローム」粒を微量に含む。

[pp6] 2層上面で検出した。1層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや弱 径5mm～1cm程度の炭化物粒を微量に含む。

[pp7] 2層上面で検出した溝状の落ち込みである。1層：10YR3/4 暗褐色砂質シルト 粘性中 しまり中 径5mm～1cm程度の炭化物粒を微量に含む。

<壁>垂直に近い角度で立ち上がる。

<溝> 05-13グリッドで、急角度で立ち上がる住居跡東側の壁が検出された。

<床>一部に貼床がみられる。床は、西側のほうが数cm～10cmほど低く、やや凹凸が目立つ。発掘時に確認された動植物遺存体はなかったが、フローテーションで植物遺体が出土した。

<炉>炉は検出されなかった。ベルト下部もしくは未調査部に存在している可能性がのこされる。

<動植物遺体>発掘時に動植物遺存体は出土しなかった。

<時期> 竪穴住居跡の時期を確定できる出土状況をしめす遺物はないが、おおむね大坂(2009a)編年の八幡堂2群段階～八幡堂3群段階、従来の型式区分では大洞A2・A'式から砂沢式までの土器しか出土していないので、住居の構築時期もこの時間幅のなかにおさまる可能性が高い。

3. 第7号竪穴住居跡(第4・6図)

幅1mのトレンチ内で検出された。2007年の試掘調査トレンチT07-10(高瀬編2008)で検出された表土直下の黒褐色土と一体の遺構である(第4図)。

<位置> R04-11, R05-11区。未調査ではあるが、R04-12, R05-12区にも分布すると推定される。

<平面形>円形もしくは楕円形を基調とすると推定されるが、調査面積が少ないため不明。

<規模>全体を調査していないため不明であるが、調査した範囲から少なくとも約7m以上の径をもつと推定される。

<重複関係>なし。

<検出面> I層直下, II・III層中。

<掘込面>耕作による削剥を受けている。

<埋土>

1層：7.5YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまりやや強 径2mm～5mm程度の「ローム」粒を微量に含む。

2層：10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性やや弱 しまり中 径1cm～10cm程度の「ローム」粒をやや多量に含む。

3層：10YR4/3 砂質シルト にぶい黄褐色 粘性中 しまりやや強 径1cm～5cm程度の暗褐色土(7.5YR3/3)を微量に含む。

<柱穴および付属・重複土坑(pp)>調査範囲においては検出されなかった。

<壁>比較的急角度で立ちあがる。

<溝>検出されなかった。

<床>II・III層中に床面が形成されている。

<炉>検出されなかった。

<動植物遺体>出土しなかった。

<時期>出土土器が少なく、調査面積も限られていることから、不明である。

(高瀬克範)

第2節 土器

ここで報告する土器の総量は、第5号竪穴住居跡1層1021g(うち掲載379g)、2層98g(うち掲載98g)、床面8g(うち掲載8g)、pp4が4g(うち掲載4g)、pp7が36g(うち掲載15g)、第7号竪穴住居跡1層43g(うち掲載3g)、2層121g(うち掲載28g)である。基本的に全て2010・2011年調査出土土器であるが、第5号竪穴住居跡出土土器には一部に2008年以前の試掘で得られていた資料も含まれている。表土出土土器は606g(うち掲載80g)で、すべて2010・2011年出土資料である。

第8図は、すべて第5号竪穴住居跡出土土器である。このうち第8図26のみが床面からの出土、それ以外は埋土1層からの出土である。

第8図1は、浅鉢形土器で、大型の破片1点と接合しない同一個体片2点がまとまって出土したものである。やや急角度で立ち上がる器形で、口縁部は残存していない。文様帯には幅広の沈線で描かれた変形工字文が配置されている。胴下部には横走るRL縄文が施され、施紋後の研磨のため節がつぶれている箇所がある。地紋施紋部には赤色顔料が残存している。2は、浅鉢もしくは台付浅鉢形土器の口縁部破片である。波状口縁を有し、口縁部文様帯に変形工字文が描かれている。内外面の沈線は細く深く、施文後に入念に磨かれている。断面V字形を呈する沈線で変形工字文が施文される。外面には黒色・赤色顔料が付着している。

3は、浅鉢もしくは台付浅鉢形土器の口縁部破片である。口縁部文様帯には深く細い沈線で変形工字文が描かれている。内面には、口唇直下に平行沈線が2条配されており、口唇部にも1条の沈線がある。内外面ともに入念に磨かれている。4は、浅鉢形土器の体部上部の破片である。やや幅広で浅い沈線で描かれた変形工字文の頂部が観察される。5は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。精良な胎土が用いられ、表面がよく磨かれている。口唇部にも1条の沈線が引かれている。いずれの沈線文も細く深い。

6は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。口唇部にキザミが施され、横走る沈線中に粘土瘤が付されている。7は、浅鉢もしくは鉢形土器の口縁部破片と考えられる。低い波状口縁で口唇部にキ

ザミがある。幅広の沈線が3条認められる。8は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。細く深い平行沈線がめぐっている。内外面は沈線内部もふくめて非常に丁寧に研磨されている。9は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部から胴部の破片である。4条の平行沈線の下部にLR縄文が認められる。地紋施紋後に研磨されいるため節がつぶれている。口縁内面にも1条に沈線がめぐる。

10は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。11は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部である。内外面に、細く深い沈線がめぐる。表面は入念に磨かれている。12は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部である。沈線は幅が広く、浅い。口唇部内外面に黒色物質が付着している。13は、小型浅鉢の口縁部破片である。二個一対となる突起のひとつが確認でき、器壁は非常に薄い。変形工字文の頂部が確認できる。沈線の幅は細いが、非常に浅い。14は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部である。口唇部にキザミがあり、たく浅めの沈線が内外面にめぐる。ミガキは入念に行われている。15は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。内外面にへ横走る沈線がめぐる。沈線の幅は狭く、深さも比較的深い。16は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片である。2個一対となる突起のひとつが残っており、外面に沈線の痕跡がかるうじて確認できる。内外面が入念に磨かれている。17は、浅鉢もしくは台付浅鉢の口縁部破片と考えられる。外面に細く浅い沈線がめぐっている。18は、粗製の深鉢もしくは鉢の口縁部破片である。口縁部に無文帯が有り、その下にLR縄文が施されている。波状口縁になるとなる可能性が高い。19は、浅鉢形土器の体部破片で、断面V字形の沈線が2条残存する。体部にはLR縄文が施文され、内面の研磨は丁寧である。外面の沈線中に赤色顔料の付着が認められる。

20は、粗製深鉢もしくは鉢形土器の口縁部である。外面は条が縦走るLR縄文によって覆われている。口縁内面側には成形時から意図的に肥厚させて製作されている。21は、粗製の深鉢もしくは鉢形土器の口縁部である。口縁部に幅の狭い無文帯を設け、その下部は地紋帯となっている。22は、粗製の鉢形土器の口縁部破片である。低い波状口縁と幅の狭い口縁部無文帯を有する。23は、浅鉢もしくは台付浅鉢

の胴部破片である。文様帯の下部から胴下半部にかけての破片で、沈線の下部は入念に磨かれているが縄文はほどこされていない。24は、浅鉢形土器ないし台付浅鉢形土器の体部破片で、残存部の上端に1条の沈線が残る。全体に密に細かな原体の横走LRが施紋される。内面には丁寧な研磨が加えられる。外面の一部に炭化物の付着が認められる。25は、小型浅鉢の底部は編と考えられる。外面最下部に2条の平行沈線がめぐり、外面の研磨は丁寧に行われているが、内面は磨かれていない。26は、唯一の床面出土土器であり、浅鉢もしくは鉢の胴下半部の破片と考えられる。内外面とも研磨されているが、外面は摩滅している。内面には黒色物質が付着している。

第9図は、1～6が第5号竪穴住居跡2層出土、7が第5号竪穴住居跡pp4の1層出土、8が第5号竪穴住居跡pp7の1層出土、9・10が第7号竪穴住居跡1層出土、11～14が第7号竪穴住居跡2層出土、15～17が表土出土である。

第9図1は、浅鉢もしくは台付浅鉢形土器の口縁部破片である。口縁部文様帯には細い沈線で工字文が施されており、内面は入念に研磨されている。外面には赤色顔料が付着している。2は鉢の口縁部破片である。口唇部に刻みを有し、文様帯には無文部が刺突で充填された波状文が描かれている。3は、浅鉢もしくは台付浅鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、2個が接合している。外面には変形工字文が描かれており、沈線は細く、深い。内外面は丁寧に磨かれている。4は、浅鉢または台付浅鉢形土器の口縁部破片である。外面には横走する沈線がめぐり、沈線は細く、深い。内外面のミガキは入念で、沈線の内部にまで及んでいる。5は、大型の浅鉢形土器の体部破片と考えられる。沈線は太く浅く、器壁も厚い。内外面とも入念に研磨されており、外面には黒色物質が付着している。6は、浅鉢形土器の底部破片である。器壁の最下部に横走する沈線が2条めぐらされている。

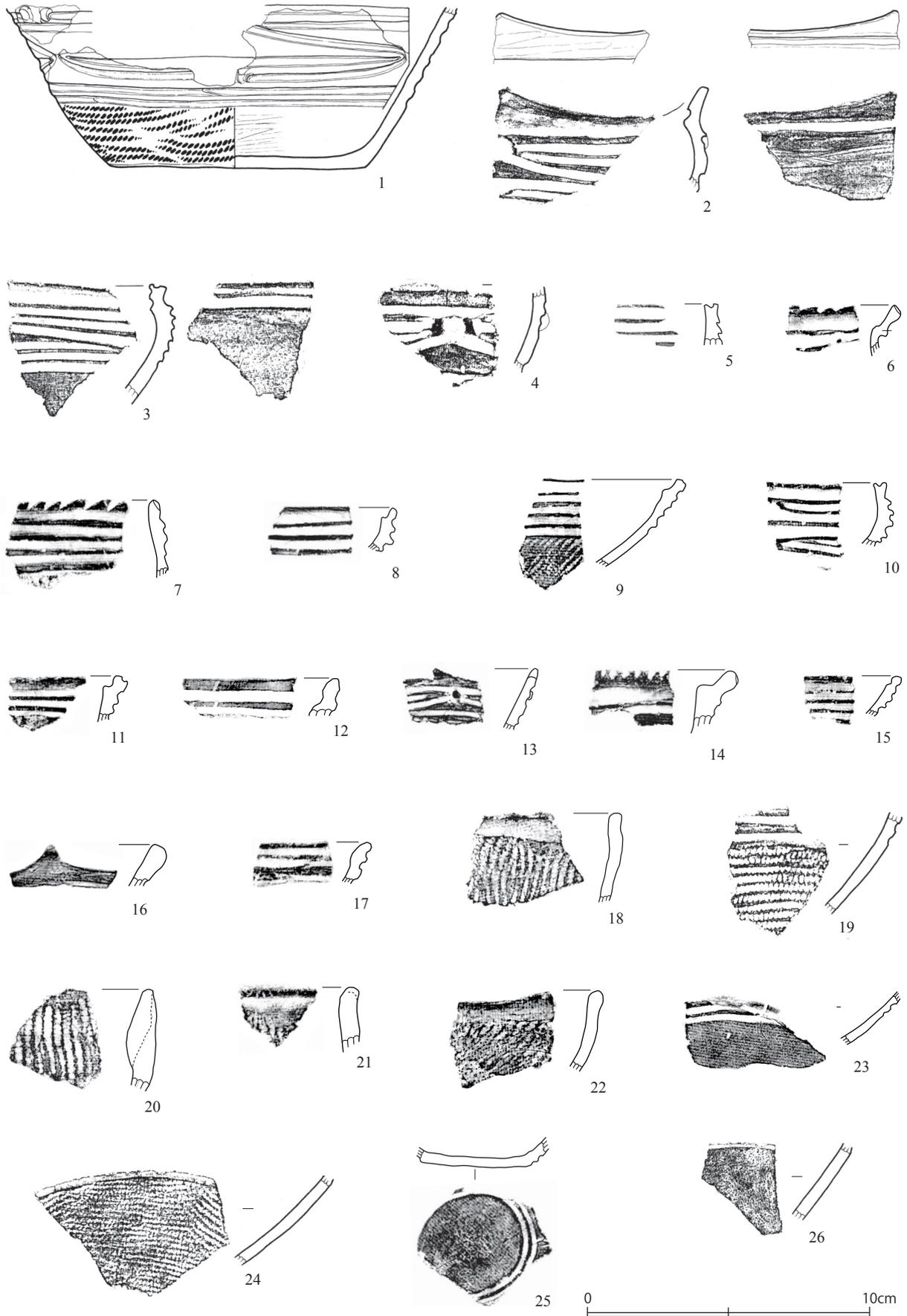
7は、浅鉢もしくは台付浅鉢形土器の底部にちかい破片である。器壁が非常にうすい。胴下半部の無文部分が大半を占めているが、下端部に横走する沈線が1条みとめられる。8は、浅鉢もしくは台付浅鉢の胴部破片である。やはり胴下半部の無文部の破片であるが、上部に文様帯下端の沈線が確認できる。内外面の研磨は入念に行われている。器壁は薄い。

9は、小型の浅鉢、台付浅鉢もしくは鉢形土器の

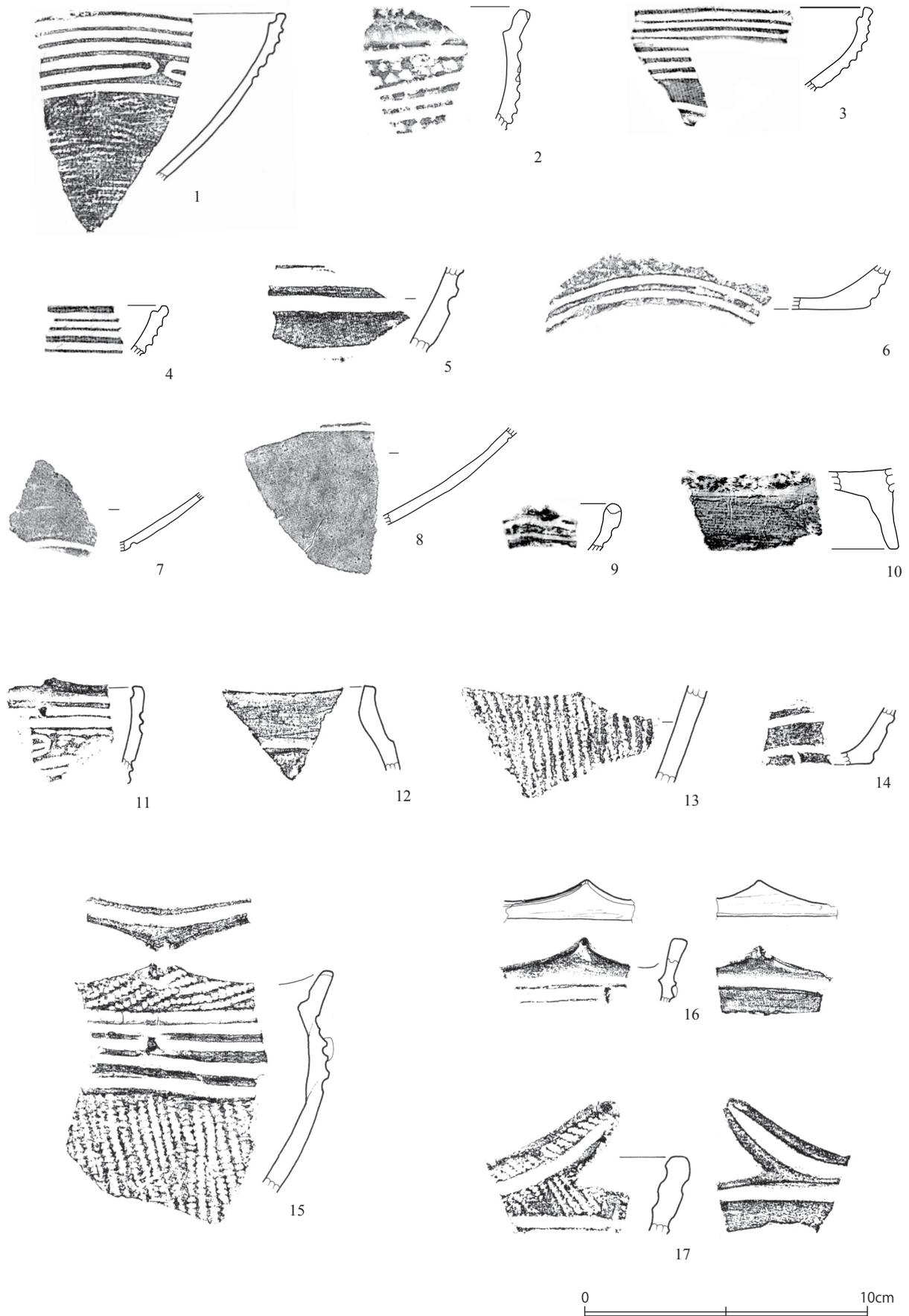
口縁部破片と考えられる。つくりが粗雑で、沈線は上下にぶれており、内外面の調整もナデのみである。器壁表面の凹凸も比較的目立つ。口唇部には中央がくぼむ突起が認められる。10は、台付浅鉢もしくは台付鉢の台部である。外面の研磨は比較的に入念に行われているが、内面はナデのみの調整である。文様は施されていない。11は、台付鉢もしくは台付深鉢形土器の口縁部破片で、波状口縁の波頂部が欠損している。細く深い沈線で波状文が施文され、無文部は刺突で充填される。12は、鉢形もしくは深鉢形土器の口縁部破片である。やや内傾する口縁部の外面に無文帯が設けられ、太く浅い沈線をはさんでその下部が地紋帯となっている。無文帯は入念に横方向に磨かれている。13は、鉢形もしくは深鉢形土器の胴部破片である。RL縄文施紋後に表面が磨かれている。14は、浅鉢形土器の底部破片である。沈線内部の一部に赤色顔料が付着している。

15は、鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片である。低い波状口縁を有し、口縁部外面と胴部外面に、LR縄文がほどこされている。肩部に文様帯が設けられ、比較的太い平行沈線と大きな粘土粒が認められる。研磨は沈線内・内面もふくめて入念に行われている。口縁内面にも沈線が1条めぐり、16は、浅鉢形土器の口縁部破片である。2個1対となる突起のうち一つが残存している。やや幅広の沈線と変形工字文の midpoint もしくは頂点に相当すると考えられる粘土瘤がみとめられる。内外面とも、入念に研磨されている。口唇部上にも沈線がめぐり、17は、浅鉢形土器の口縁部破片である。全体の形状が浅いU字形となる大形の突起の半分程度が残存している。RL縄文と太く浅い沈線文が確認され、内外面に炭化物がうすく付着している。

(高瀬克範)



第8図 出土土器(1) (1-25: 第5号竪穴住居跡1層, 26: 第5号竪穴住居跡床面)



第9図 出土土器(2) (1-6:第5号竪穴住居跡2層, 7:第5号竪穴住居跡 pp4-1層, 8:第5号竪穴住居跡 pp7-1層, 9・10:第7号竪穴住居跡1層, 11-14:第7号竪穴住居跡2層, 15-17:表土)

第3節 石器

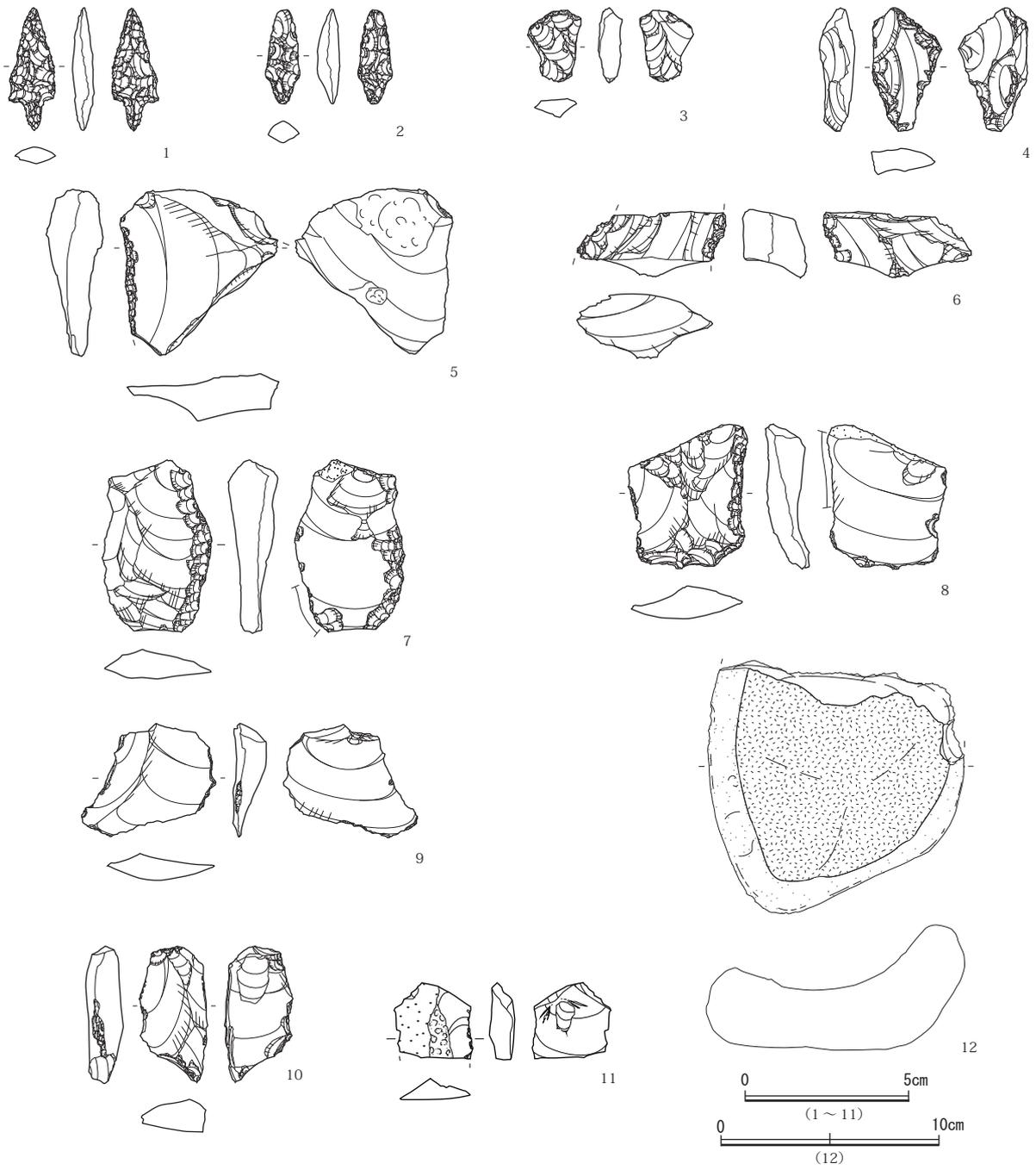
出土した剥片石器は25点(計180.1g)、礫石器(赤色顔料や接合する礫を含む)は5点(計1421.3g)と非常に少ない。第1表には全点の基本的な情報をしめし、第10図には遺構出土剥片石器のうち石鏃・楔形石器・スクレイパー・二次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片の全点、遺構出土礫石器のうちツール全点を図示した。

第10図1・2はともに、第5号竪穴住居跡1層出土の頁岩製石鏃である。二等辺三角形の基部に茎がつく形状で、これまでも江豚沢遺跡ではもっとも多く出土している形態である。3は、第5号竪穴住居跡1層出土の楔形石器である。岩石は、頁岩が用いられている。4～8はスクレイパーである。4は第7号竪穴住居跡2層出土の頁岩製で、二辺に連続的な調整が加えられている。5・7はともに第5号竪穴住居跡1層出土で、頁岩製である。5は、一部に自然面が残存する素材剥片の一辺に連続的な調整が加えられている。7は、縦長の剥片の両側縁に連続的に調整が加えられている。6・8は第5号竪穴住居跡2層出土で頁岩製である。6は大部分が欠損しているが、比較的厚い剥片もしくは石核の縁辺に連続的な調整が施されている。8は、打面に自然面が残存する素材剥片の両側縁に連続的に調整が加えられている。

9・10は、二次加工ある剥片である。9は第5号竪穴住居跡2層出土で頁岩製で、10は第5号竪穴住居跡1層出土で頁岩製である。11は頁岩製の微細剥離痕ある剥片で、背面に被熱によるハジケの痕跡が認められる。背面右側の側縁に刃こぼれが認められる。

12は、第5号竪穴住居跡1層から出土した石皿である。岩石は、安山岩が用いられている。凹面全体が研磨によって摩耗しているが、肉眼で観察するかぎり明確な赤色顔料の付着は認められない。

(高瀬克範)



第10図 出土石器（2010・2011年調査，1・3・5・7・10・12：第5号竪穴住居跡1層，6・8・9：第5号竪穴住居跡2層，11：第5号竪穴住居跡pp5-1層，4：第7号竪穴住居跡2層）

第1表 出土石器一覧 (2010・2011年調査)

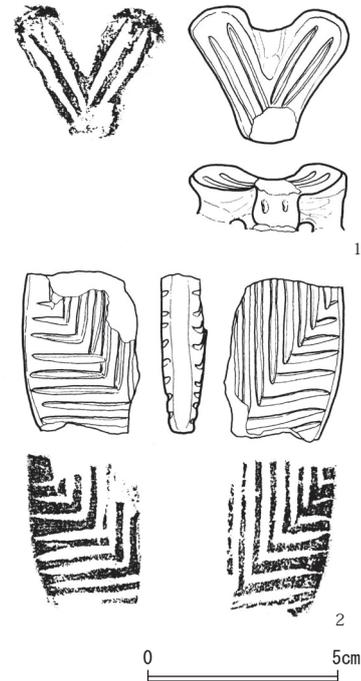
No.	図版 番号	器種	出土遺構	層位	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	岩石	備考
2010 - 1	第10図8	スクレイパー	第5号竪穴住居跡	2	39.1	44.9	9.8	15.1	頁岩	
2010 - 2	第10図6	スクレイパー	第5号竪穴住居跡	2	(21.2)	(44.8)	18.6	13.8	頁岩	
2010 - 3	第10図9	二次加工ある剥片	第5号竪穴住居跡	2	33.1	41.3	9.8	7.4	頁岩	
2010 - 4		剥片	第5号竪穴住居跡	1	(35.1)	(34.9)	9.1	9.6	頁岩	
2010 - 5	第10図5	スクレイパー	第5号竪穴住居跡	1	(49.1)	(45.3)	13.6	20.5	頁岩	被熱
2010 - 6	第10図7	スクレイパー	第5号竪穴住居跡	1	53.2	33.5	12.6	18.5	頁岩	
2010 - 7	第10図1	石鏃	第5号竪穴住居跡	1	37.8	13.9	5.6	1.5	頁岩	
2010 - 8	第10図2	石鏃	第5号竪穴住居跡	1	29.1	10.3	6.5	1.1	頁岩	
2010 - 9	第10図10	二次加工ある剥片	第5号竪穴住居跡	1	(41.8)	(21.1)	9.5	6.4	頁岩	
2010 - 10	第10図3	楔形石器	第5号竪穴住居跡	1	(22.1)	(16.2)	4.9	1.9	頁岩	
2010 - 11		剥片	第5号竪穴住居跡	1	(39.1)	(22.1)	11.4	10.7	頁岩	被熱
2010 - 12		剥片	第5号竪穴住居跡	1	(20.5)	(28.1)	4.6	3.2	頁岩	被熱
2010 - 13		剥片	第5号竪穴住居跡	1	39.1	38.0	11.4	18.3	頁岩	
2010 - 14		剥片	第5号竪穴住居跡	1	22.0	27.1	4.8	1.9	頁岩	
2010 - 15		剥片	第5号竪穴住居跡	1	(34.7)	(14.6)	8.3	3.6	頁岩	
2010 - 16		剥片	第5号竪穴住居跡	1	10.9	22.0	4.9	0.8	シルト岩	
2010 - 17		剥片	第5号竪穴住居跡	1	8.9	5.5	1.5	0.2	頁岩	
2010 - 18		赤色顔料原石	第5号竪穴住居跡	1	31.3	21.2	16.4	13.1	赤鉄鉱	
2010 - 19		二次加工ある剥片	表土	I	(44.0)	(25.2)	13.6	12.7	頁岩	
2010 - 20	第10図4	スクレイパー	第7号竪穴住居跡	2	37.1	20.3	9.8	4.4	シルト岩	
2010 - 21		礫	第5号竪穴住居跡	2	(98.8)	(65.8)	8.2	92.7	砂岩	2010-22 と接合
2010 - 22		礫	第5号竪穴住居跡	2	(102.1)	(64.3)	36.4	296.5	砂岩	2010-21 と接合
2010 - 23	第10図12	石皿	第5号竪穴住居跡	1	(117.6)	(121.5)	60.7	889.2	安山岩	
2010 - 24		スクレイパー	表土	I	47.2	39.1	10.1	15.2	頁岩	
2011 - 1		台石	表土	I	(69.8)	(63.0)	(25.7)	129.8	安山岩	
2011 - 2		剥片	第5号竪穴住居跡 pp4	1	15.0	23.3	3.1	0.7	頁岩	
2011 - 3		剥片	第5号竪穴住居跡	3	(20.2)	(25.4)	6.5	2.6	頁岩	
2011 - 4	第10図11	微細剥離痕ある剥片	第5号竪穴住居跡 pp5	1	(22.5)	22.9	7.0	4.3	頁岩	
2011 - 5		剥片	第5号竪穴住居跡	1	(35.1)	(14.2)	3.7	1.7	安山岩	
2011 - 6		剥片	表土	I	(13.3)	33.5	10.9	4.0	頁岩	

第4節 土製品

表土から2点の土製品(計36g)が出土しており、全てを図示した(第11図)。第11図1は土器の突起の一部の可能性もあるものだが、類例がないため土製品として扱った。上面観はY字状をなしており、2条1組の沈線文が施文され、先端部には2個1対の刺突文が加えられる。これがいわゆる「獣頭突起」だとすれば、先端部の刺突が鼻孔表現に相当しよう。下部は橋梁状をなしており、粘土紐の接合面から剥離している。

2は「土版」である。破断部に粘土の剥離面が露呈しており、複数のパーツをはり合わせて成形していることがわかる。A面、B面ともに、断面がV字状をなす沈線が施文されている。

(大坂 拓)



第11図 出土土製品(2010・2011年調査)

第5節 大型植物遺体

第5号竪穴住居跡1・2層から土壌サンプルを採取し、微細な自然遺物の回収をおこなった。土壌サンプルの容量は、1層が1.0リットル、2層が0.8リットルである。0.425mmメッシュのフルイを用いてフローテーションを行った結果、1層から2個、2層から3個の酸化した植物種子が検出された(写真図版8)。いずれも一端がとがるかぶら形にちかい広卵形で、表面を覆う凹みが認められる。長さは1.2mm～1.5mmで、片面の中央部に穴のあいているものもある。形態学的特徴からタデ属と同定された。

(高瀬克範)

第3章 まとめ

第1節 出土土器の年代的位置づけ

本書にかかわる調査でもっとも重要な課題の一つに、第5・7号竪穴住居跡が、これまでに調査してきた第1・2・4・6号竪穴住居跡（高瀬編2012）とどのような時間的關係にあるのかがあげられる。この問題を考えるために、出土土器の年代的な位置づけについて考える。

第5号竪穴住居跡は、調査範囲が遺構の一部のみであったことで、床面からの出土土器が第8図26の1点のみにとどまった。この土器片は、浅鉢もしくは台付浅鉢の胴部とみられる破片であるが、明確な時期判定ができる資料ではない。ただし、器壁が比較的薄いことや上端にわずかにのこる沈線が細い点は注目される。

埋土1層出土土器では、第8図1・4のように幅広く浅い沈線によって比較的大きめの粘土瘤をともなう変形工字文がみられる一群と、第8図2・3・8・11・15のように断面がV字にちかい細く深い沈線で変形工字文・平行沈線がえがかれ、なおかつな口縁内面にも同様の沈線がめぐる一群、さらに第8図10のように同様の浅鉢形の器形でありながらも浮文的な表現となっている変形匹字文が確認できる資料が混在している。

埋土2層や付属柱穴状土坑でも同じような特徴のある土器が出土している。pp4・7出土の第9図7・8は、第5号竪穴住居跡床面出土の第8図26とほぼ同様の器種・部位の破片とみてよく、細めの沈線や無文帯も類似する。2層出土の第9図2は太く浅い沈線で波状工字文が描かれているが、3・4・6には明らかに細く深い沈線による変形工字文・横走沈線が描出されている。

従来の型式区分と対比すると、太く浅い沈線をもつ一群（第8図1・2、第9図2）は砂沢式に類似する。また、細く深い沈線で描かれる変形工字文を有する一群（第8図2・3・8・11・15、第9図3・4・6）は大洞A'式に、変形匹字文的な文様表現となっている一群（第8図10）は大洞A2～A'式に対比できると思われる。量的には、大洞A'式に比定できる資料がもっとも多いと考えられる。近年、津軽・下北半島のこの時期の土器群に関しては、異なる基準によ

て八幡堂1・2・3群、梨ノ木平段階、戸沢川代段階に細分する編年案も提起されている（大坂2009a）。すでに2010年の江豚沢遺跡調査概報で大坂が述べているように（高瀬・大坂2011）、上記の砂沢式に類似する一群は戸沢川代段階、大洞A'式に比定できる一群は八幡堂2群段階に位置づけられている。沈線が太い第9図5についても、「器厚からみてかなり大形の個体であるため、沈線の幅のみをもって時期が降るものと考えerことはできない。沈線の断面形態などはむしろ八幡堂遺跡出土の八幡堂2群段階の個体（安藤編2009:第26図62）によく類似している。また、器面に黒色物質の顕著な付着が認められる点も、津軽・下北半島では八幡堂3群段階以前の特徴である。以上の点から、ここでは8（本書の第9図5…高瀬註）を八幡堂2群に属する可能性が高いものとする。」（高瀬・大坂2011, p.74）と判断されており、戸沢川代段階よりも古くなるとの見通しがしめされている。

第7号竪穴住居跡出土土器については、第9図11・14は砂沢式もしくは大坂編年の梨ノ木平段階以降に位置づけられる。このほか、第9図9・10・12・13の時期は必ずしも明確ではないが、砂沢式の新しい段階もしくは戸沢川台段階よりは古くなる可能性が高い。

このような出土土器の時期判断から、第5号竪穴住居跡の時期は、現段階で決定的な証拠にかけるが、砂沢式・戸沢川代段階よりも古い蓋然性が高く、大洞A2～A'式あるいは八幡堂3群以前に位置づけられるものと考えておきたい。第7号竪穴住居跡についてはさらに情報が少ないが、砂沢式もしくは戸沢川代段階までくぐる可能性は皆無ではないとしても、それ以前に位置づけられる可能性もあるとみておきたい。

このほか、出土土器で注目される点として、すでに大坂（高瀬・大坂2011）が指摘している器壁が薄い八幡堂3群としての第9図16の存在、二枚橋式の粗製土器の祖型となる口縁内面が肥厚する第8図20の存在などがあげられる。

（高瀬克範）

第2節 石器の使用痕分析

出土石器の使用法解明を目的として、高倍率法 (Keeley1977, 1980) による石器使用痕分析を実施した。資料の観察には、落射照明付き金属顕微鏡 (オリンパス BX-FM, 総合倍率 100 ~ 500 倍) をもちい、顕微鏡写真の撮影には上記顕微鏡に装着したデジタルカメラ (オリンパス DP-20OLYMPUS, CAMEDIA C-4040 ZOOM) を利用した。なお、観察にさきだつて、エタノールを含ませた脱脂綿で資料表面の油脂分を除去した。使用痕光沢面 (ポリッシュ) の分類は、自らの石器使用実験結果をふまえたうえで、梶原・阿子島 (1981), 阿子島 (1989) にしたがった。

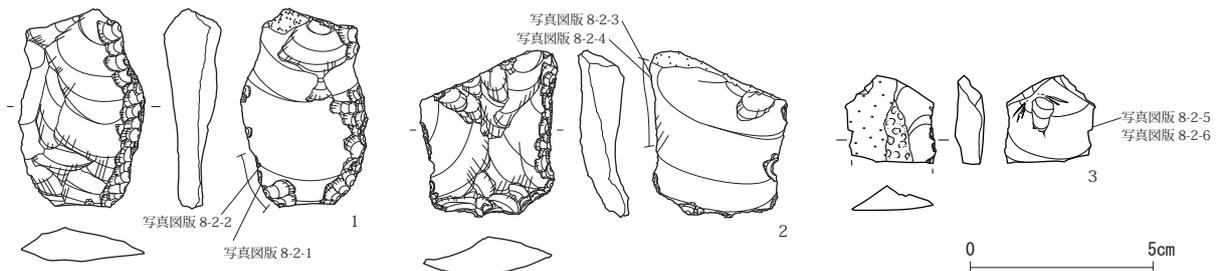
2010・2011 年の発掘調査で出土した 25 点の剥片石器全点を検鏡した結果、3 点に使用痕がみとめられた。第 12 図 1 の頁岩製スクレイパーには、連続的に二次加工が加えられた縁辺の一部に使用痕光沢面が認められた (写真図版 8-2-1・2)。縁辺部に形成された摩耗面上に、にぶく大小のピットに覆われた光をあまり反射しない特徴を有する使用痕光沢面が分布する。乾燥した皮革との相関性が高い E2 タイプに比定される。線状痕は、縁辺に対して直交する方向にはしている。比較的水分を含まない状態の皮革の掻き取り (スクレイピング) もしくは削り (ホイットリング) に用いられたと推定される。

第 12 図 2 にしめした頁岩製のスクレイパーには、細かな二次加工が加えられている縁辺の一部に、なめらかで断面形が丸みを帯びる使用痕光沢面が認められた (写真図版 8-2-3・4)。すべてイネ科植物・木への作業との相関性がたかい、B タイプに分類されるものである。線状痕は明確ではないが、確認できる箇所では縁辺に対して直交する方向にはしている。分布域がせまく、最大でも縁辺から 1mm に満たない範囲にかぎられていることから比較的硬い被加工物

に対して用いられた可能性ものこされる。したがって、草本とともに木本への作業が考慮されるが、いずれにせよ植物質資源の加工に利用された可能性がきわめて高い資料と判断される。

第 12 図 3 の微細剥離痕ある剥片には、腹面側の右側縁がわずかにえぐれた箇所凸部に、表面がなめらかで断面が比較的丸みをおびている使用痕光沢面 (ポリッシュ) が確認された (写真図版 8-2-5・6)。形態学的特徴は B タイプにもっとも類似しており、光沢面上の線状痕は刃縁に対して直交方向にはしている。植物に対して掻き取りもしくは削りの動作で用いられたと推定されるが、使用痕光沢面の分布が縁辺の非常に狭い範囲に限定されている。よって、被加工物は草本よりも硬かった可能性が想定され、木の掻き取り・削りに用いられた可能性が最も高いと考えられる。

(高瀬克範)



第 12 図 使用痕が確認された石器

第3節 江豚沢遺跡の範囲と性格

第1章第1節で述べた3つの調査目的のうち、包蔵地西側の遺構または谷地形と考えられていた箇所の確認では、その周辺に遺構は確認されず、谷地形が存在していることが明らかになった。確認した地点では深さ85cmほどの浅い谷地形であり、それを埋めている土壌の直下が「ローム」層となっていた。「ローム」層中から採取した木炭の放射性炭素年代 $3685 \pm 35\text{BP}$ (TKa-15354)は想定よりも非常に若かったため、何らかの要因で混入した木炭であつたと推定される。現時点では谷地形の形成年代が判明しているわけではないが、谷内部の埋積土と竪穴住居跡の埋土が類似していること、谷地形と重複関係を有する遺構がないこと、谷よりも西側で遺構が分布しないことなどから、江豚沢遺跡の形成時にはすでに存在しており、集落の廃絶後に埋まった谷と考えておきたい。

すでに明らかになっている竪穴住居跡の分布と試掘調査の結果から考えて、この谷地形が江豚沢集落の西端となっているとみなすことができる。現在の包蔵地の範囲には、筆者らが全面的に試掘を行った工藤氏所有の畠地とその北側の植林地をふくむ範囲が括られており、これは遺物が採集できる範囲をもとにした認識であると考えられる。しかし、遺構の分布の観点から江豚沢遺跡の西側を画するならば、この谷地形が西端となり遺構はその東側のほうにひろがっていることが明らかになった。

第2の目的であった第7号竪穴住居跡の規模と埋土の確認については、少なくとも径7m以上あることや上面の削割のため埋土の保存状況は良くはなく、深さは残りのよい東側で20cm強、西側ではわずか数cmしかないことなどを明らかにすることができた。平面形や炉は明確にはできなかったが、将来の調査に役立つ最低限の情報は回収できたと思われる。

第3の目的は、第5号住居跡の規模・付帯施設・時期についての情報をえることであった。この点については、プランは不整楕円形で径が少なくとも8m以上はあると推定されることが明らかにされた。周溝も確認されたが、トレンチ内では炉は確認できなかった。遺構の時期を決定づける出土状況を呈する土器もなかったが、周辺の1・2・4号竪穴住居跡よりも古い八幡堂3群以前の土器の比率が相対的に高

くなっている点は注目される。第5号竪穴住居跡は、第4号竪穴住居跡に切られているため遺構の形成順序にかかわる発掘所見とも整合的である。

このような第5・7号竪穴住居跡の調査成果に代わって、2003～2009年の調査によって判明している事実を考え合わせると、江豚沢遺跡は縄文文化晩期間後葉～弥生文化前期にかけての集落であると断言できる。しかも、その集落は直径7～10m以上の円形や楕円形の平面形を呈する大型の竪穴住居のみによって構成される点を、最大の特徴としてあげることができる。近年、住居の大型化自体は本州島東北部北部の縄文後・晩期からみられることが指摘されるようになってきているが(斎野2011, 根岸2014)、大型住居だけで構成されるような集落はおそらく縄文晩期終末期になってから出現し、弥生前期段階で一般化することはほぼ間違いないと思われる。

ただし、大型の竪穴住居が大洞A1式期以前から存在している点は、かつて高瀬(2004)が予測したような住居大型化と稲作導入のあいだの不可分の結びつきは必ずしも成り立たないことをしめしている。江豚沢遺跡でも大型の住居が複数認められており、下北半島における中核的な集落の一つであったと考えられるにもかかわらず、穀物の栽培・利用が行われていたことを示す証拠は一切得られていない(高瀬編2012)。それでもなお、比較的大規模な稲作を開始していた秋田平野・津軽平野などと類似した住居が下北半島でも採用され、土器・石器をはじめとする日常什器や利器だけでなく、儀器・葬制の面でも本州島東北部一帯で高い共通性が維持されている。生業の差は確かにあるものの、考古学的な文化グループの水準においては本州島東北部の北部は大まかに一括りにすることができる地域であり、こうした地域社会のなかに稲作を行う小地域と、狩猟・採集に依存する小地域が複合していたのが実態とみるべきなのであろう。本書にかかわる発掘調査によって、この点をあらためて確認することができた。

今後の課題は、このような特徴をもつ本州島東北部と続縄文文化前期の北海道島との関係をどのように整理するかにつづいてくるであろう。

(高瀬克範)

第4節 花粉分析

1. はじめに

青森県むつ市に所在する江豚沢遺跡は弥生時代前期の集落跡である。遺跡の西側には深さ 85cm 程度の谷地形が存在し、集落廃絶後に埋積していったと推測されている。谷地形の埋積時における古植生を検討するために、谷地形の埋土が採取された。以下では、試料について行った花粉分析の結果を示し、古植生変遷について検討した。

2. 試料と方法

分析試料は R08-11 区のトレンチ北壁から採取された 3 点である (第 2 表)。これらの試料について、次の手順で分析を実施した。

試料 (湿重量約 3～4g) を遠沈管にとり、10% 水酸化カリウム溶液を加え 10 分間湯煎する。水洗後、46% フッ化水素酸溶液を加え 1 時間放置する。水洗後、比重分離 (比重 2.1 に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離) を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理 (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の割合の混酸を加え 20 分間湯煎) を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。この残渣よりプレパラートを作製した。プレパラートは樹木花粉が 200 を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。ただし、No.2 と No.3 は花粉化石の保存状態が良好ではなく、数枚のプレパラートを観察しても樹木花粉 200 は得られなかったため、プレパラート 1 枚を観察するに留めた。さらに、保存状態の良好な花粉を選んで単体標本 (PLC.1736～1742) を作製し、写真を写真図版 9 に載せた。

3. 結果

3 試料から検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉 12、草本花粉 10、形態分類のシダ植物胞子 2 の、総計 24 である。これらの花粉・胞子の一覧表を第 3 表に、分布図を第 13 図に示した。分布図における樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とした

百分率、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。なお、No.2 と No.3 は十分な量の花粉化石が得られていないが、産出傾向を把握するため、分布図には示してある。また、図表においてハイフン (-) で結んだ分類群は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。

十分な量の花粉化石が得られていない No.2 と No.3 では、ハンノキ属やコナラ属コナラ亜属、トチノキ属、シナノキ属などの落葉広葉樹の産出が目立つ。草本花粉ではイネ科とカラマツソウ属、ヨモギ属の産出が目立つ。十分な量の花粉化石が得られた No.1 では、トチノキ属が圧倒的に多く産出しており、94% の産出率を示す。

4. 考察

十分な量の花粉化石が得られなかった No.2 と No.3 の層準は、褐色系と黒色系の堆積物が斑状に堆積しているが、十分な量の花粉化石が得られた No.1 の層準は黒味が増している。花粉化石の保存状態と層相の相違が一致しているため、花粉化石の保存状態の良し悪しは堆積環境に起因する要因、例えば、堆積速度や花粉の保存に適さない酸化的環境などが影響している可能性がある。

不十分ながらも、No.2 と No.3 から産出した分類群を見ると、ハンノキ属やコナラ属コナラ亜属、トチノキ属、シナノキ属などの産出が目立つ。これらの花粉化石群集に基づき当時の古植生を推察すると、谷地形の水分条件の良好な場所にはハンノキからなる湿地林が存在していた可能性がある。また、トチノキは沢沿いなどの水分条件の良好な場所に生育する植物であり、No.2 ではトチノキ属の花粉塊も産出しているため、谷地形の湿地的環境の場所のすぐそばにはトチノキ林が分布を広げていたと考えられる。その周辺にはコナラ属コナラ亜属やシナノキ属などの落葉広葉樹林が広がり、草本類ではイネ科やカラマツソウ属、ヨモギ属などが落葉広葉樹林の下草として生育していたと思われる。

第 2 表 分析試料一覧

地点	試料 No.	層位	土相
R08-11 区	No.1	谷 1 層	暗灰黄色 (2.5Y 4/2) シルト
R08-11 区	No.2	谷 2 層	黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト
R08-11 区	No.3	谷 3 層	黄褐色 (2.5Y 5/3) シルト

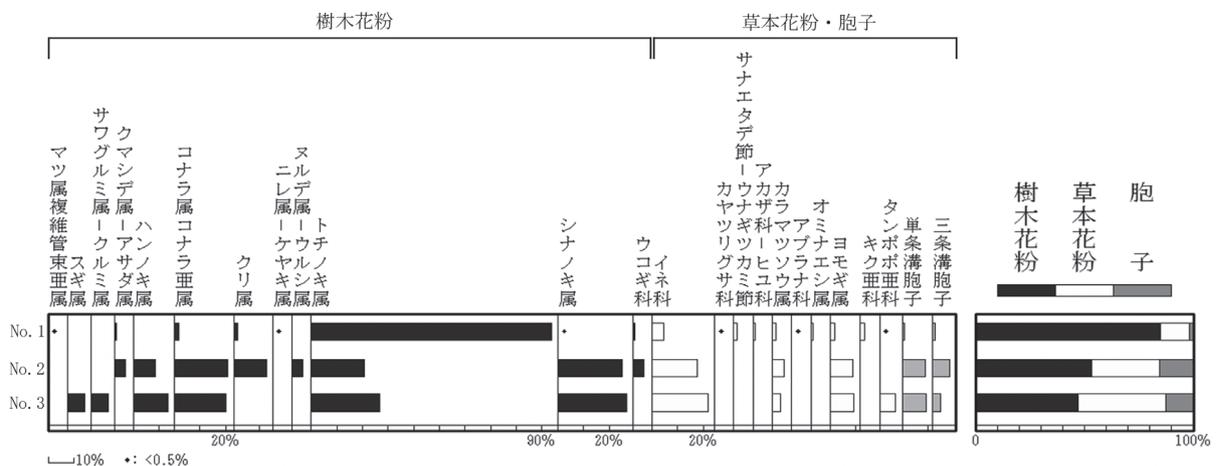
十分な量の花粉化石が産出した No.1 では、トチノキ属が圧倒的な産出率を示す。No.1 の堆積時には、谷地形周辺はトチノキの純林に囲まれていた可能性がある。なお、青森県内では三内丸山遺跡（吉川ほか、2006）や大矢沢（後藤・辻、2000）で、縄文時代中期後半におけるクリ林からトチノキ林への植生変化が捉えられており、このトチノキ林は弥生時代な

いし古墳時代まで継続して存在する。No.1 で見られるトチノキ属花粉の多産は、縄文時代後晩期～弥生時代に青森県の遺跡を中心に優勢であったトチノキ林の存在を反映している可能性が高い。

（森 将志（パレオ・ラボ））

第3表 産出花粉孢子一覧

学名	和名	No.1	No.2	No.3
樹木				
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属	1	-	-
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	-	-	1
<i>Pterocarya - Juglans</i>	サワグルミ属-クルミ属	-	-	1
<i>Carpinus - Ostrya</i>	クマシデ属-アサダ属	2	1	-
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	-	2	2
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	4	5	3
<i>Castanea</i>	クリ属	3	3	-
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属-ケヤキ属	1	-	-
<i>Rhus - Toxicodendron</i>	ヌルデ属-ウルシ属	-	1	-
<i>Aesculus</i>	トチノキ属	208	5	4
<i>Tilia</i>	シナノキ属	1	6	4
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科	2	1	-
草本				
Gramineae	イネ科	12	8	7
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1	-	-
<i>Polygonum sect. Persicaria - Echinocaulon</i>	サナエタデ節-ウナギツカミ節	3	-	-
Chenopodiaceae - Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	2	-	-
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ属	4	2	1
Brassicaceae	アブラナ科	1	-	-
<i>Patrinia</i>	オミナエシ属	2	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	5	4	3
Tubuliflorae	キク亜科	4	-	-
Liguliflorae	タンポポ亜科	1	-	2
シダ植物				
monolete type spore	単条溝孢子	2	4	3
trilete type spore	三条溝孢子	3	3	1
Arboreal pollen	樹木花粉	222	24	15
Nonarboreal pollen	草本花粉	35	14	13
Spores	シダ植物孢子	5	7	4
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	262	45	32
unknown	不明	4	1	-



第13図 江豚沢遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・孢子は産出花粉孢子総数を基数として百分率で算出した

〔調査者のコメント〕

第1章第4節で述べたように、遺跡西側で深さ85cmほどの谷状の地形が認められた(第6図)。谷を埋める堆積物は黒褐色もしくはオリーブ黒色であり(写真図版1-1)、弥生文化期の包含層およびその後堆積した堆積物の残存状況が不良である本遺跡において、谷内部の花粉分析が弥生文化期およびそれ以降の周辺植生の理解に役立つと予測し花粉分析を実施した。谷の埋土は、上位から谷1層、谷2層、谷3層に区分され、それぞれの層から花粉分析用の土壌試料No.1～3を採取した。なお、各層の時期は出土人工遺物によっても、理化学的な年代測定によっても明確にはなっていないが、弥生文化期の遺構が谷地形よりも西側には分布しないこと、谷3層がI層直下に認められる点などから、弥生文化期にはすでに存在した微地形であり、それ以降に埋積したものと予測している。

分析の結果、谷2・3層(No.2・3)からは十分な量の花粉が得られなかったが、谷1層(No.1)から多量のトチノキ花粉が検出された点は、弥生文化期以降のある段階における江豚沢遺跡周辺の植生の特徴をよく表しているものと考えられる。現状では広範囲にわたって針葉樹が植林され、遺跡北側の奥内川周辺でも水田が放棄されたのちヤナギ属が優勢となる河畔林がみられるため、過去の「江豚沢集落」周辺の植生を推定することは難しい。しかしながら、少なくとも過去約2400年間のある段階においては江豚沢遺跡周辺でもトチノキが多かったことが、今回の分析により確実となった。

(高瀬克範)

引用文献

- 青森県教育委員会 1998『青森県遺跡地図』青森県教育委員会。
- 阿子島香 1989『石器の使用痕』ニューサイエンス社。
- 安藤広道編 2009『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』（課題番号:18520589）平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））。
- 石川日出志編 2005『関東・東北弥生土器と北海道続縄文土器の広域編年』（課題番号:14310189）平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金（研究基盤（B）（2））研究成果報告書。
- 江坂輝彌 1953「青森県下北郡田名部奥内江豚沢遺跡」『貝塚』47: 218-219。
- 大坂 拓 2009a「Ⅲ - 2. 下北地域における初期弥生土器編年」安藤広道編 2009『東日本先史時代土器編年における標式資料・基準資料の基礎的研究』（課題番号:18520589）平成 18～20 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）），pp.113-125。
- 大坂 拓 2009b「大洞 A2 式土器の再検討—山形県天童市砂子田遺跡・山形市北柳 1 遺跡出土土器群の編年の位置—」『考古学集刊』第 5 号 pp.39-74 明治大学考古学研究室。
- 大坂 拓 2012「第 4 章第 7 節 本州島東北部における初期弥生土器の成立過程—大洞 A' 土器の再検討と「特殊工字土器群」の提唱—」高瀬克範編『江豚沢 I』，pp.113-125，江豚沢遺跡調査グループ。
- 大畑町教育委員会 2001『二枚橋 (2) 遺跡発掘調査報告書』大畑町教育委員会。
- 葛西 勳編 1996『宇鉄遺跡』宇鉄遺跡発掘調査会。
- 梶原 洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究—ポリッシュを中心とした機能推定の試み—」『考古学雑誌』67-1, pp.1-36。
- 工藤竹久 1987「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』72-4, pp.39-68。
- 後藤香奈子・辻 誠一郎 2000「青森平野南部，青森市大矢沢における縄文時代前期以降の植生史」『植生史研究』，9, PP.43-53。
- 小山浩平 2007『葉色遺跡』青森県教育委員会。
- 小山正忠・竹原秀雄 1967『新版標準土色帳』日本色研事業株式会社。
- 齋藤瑞穂 2004「江豚沢遺跡の周辺遺跡（縄文時代晩期～弥生時代）」，高瀬克範編 2004『青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2003 年度）』，pp.6-9，江豚沢遺跡調査グループ。
- 齋藤瑞穂・福田正宏 2003「縄文／弥生移行期の下北半島についての一考察—一般調査の成果にもとづいて—」『北方探求』5, pp.26-49。
- 斎野裕彦 2011「東北地方」甲元眞之・寺沢薫編『講座日本の考古学 5 弥生時代（上）』，pp.430-484。
- 榊原滋高・長利豪美編 2001『岩井・大沼遺跡』市浦町教育委員会。
- 鈴木克彦 1978「青森県の弥生時代土器集成 III」『考古風土記』5, pp.189-210。
- 須藤 隆 1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』56-2, pp.10-65。
- 高瀬克範 2004『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房。
- 高瀬克範 2010「江豚沢遺跡（2003～2009 年）」『むつ市文化財調査報告』38: 17-30, むつ市教育委員会。
- 高瀬克範・大坂 拓 2011「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2010 年度）」『考古学集刊』7, pp.63-78。
- 高瀬克範 2012「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2011 年度）」『北方人文研究』5, pp.33-39。
- 高瀬克範・大坂 拓 2011「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘調査概報（2010 年度）」『考古学集刊』7: 63-78。
- 高瀬克範編 2008『江豚沢遺跡発掘調査概報（2007 年度）』江豚沢遺跡調査グループ。
- 高瀬克範編 2012『江豚沢 I』江豚沢遺跡調査グループ。
- 橘 善光 1951「青森県下北半島大湊町に於ける先史時代遺跡」『貝塚』42, p.2。
- 橘 善光 1952「青森県下北郡八森遺跡発掘調査概報」『貝塚』32, pp.3-4。
- 橘 善光 1975「下北半島の弥生土器の研究 (7)」『うそり』12, pp.57-69。
- 橘 善光 1979「むつ市城ヶ沢大川目遺跡」『むつ市文化財調査報告』5, pp.1-26, むつ市教育委員会。
- 橘 善光 1987「中島全二蒐集遺物集成（五）」『うそり』24, pp.56-70。
- 橘 善光 1988「中島全二蒐集遺物集成（六）」『うそり』25, pp.68-86。
- 橘 善光 1995「中島全二蒐集遺物集成（十二）」『うそり』32, pp.61-75。
- 橘 善光 1994「第 2 章新石器時代（1）江豚沢遺跡」『むつ市史 原始・古代・中世編』，pp.394-398, むつ市。
- 橘 善光・佐藤敏次 1988「梨ノ木平遺跡第 2 次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』14, pp.55-148, むつ市教育委員会。
- 橘 善光・佐藤敏次 1990「梨ノ木平遺跡第 3 次発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』16, pp.3-122, むつ市教育委員会。
- 橘 善光・奈良正義 1986「梨ノ木平遺跡発掘調査報告」『むつ市文化財調査報告』12, pp.19-72, むつ市教育委員会。
- 橘 善光・山本一雄 1967「青森県むつ市江豚沢遺跡調査概報（1）」『うそり』4: 17-23。
- 地質調査所 1961『五万分の一地質図幅 近川』。
- 成田誠治ほか 1988「むつ市角違 (3) 遺跡発掘調査」『調査研究年報』12, pp.97-112。
- 根岸 洋 2014「東北地方北部における弥生時代大型竪穴住居の成立背景—秋田平野・男鹿半島・能代平野を中心に—」『完新世の気候変動と縄文文化の変化』（平成 22 年度～平成 25 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書），pp.33-55。
- 東通村教育委員会 2003『瀧之不動明遺跡・岩屋近世貝塚発掘調査報告書—主要地方道むつ尻屋崎線道路改良（岩屋パイパ

- ス) 事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—』東通村教育委員会。
江豚沢遺跡調査グループ 2006「青森県むつ市江豚沢遺跡発掘
調査概報(2004年度)」『貝塚』61, pp.29-50。
福田正宏 2000「北部亀ヶ岡式土器としての聖山式土器」『古代』
108, pp.129-158。
山崎晴雄 2001「下北半島」小池一之・町田洋編『日本の海成
段丘アトラス』,pp.26-27, 東京大学出版会。
吉川昌伸・鈴木 茂・辻 誠一郎・後藤香奈子・村田泰輔 2006「三
内丸山遺跡の植生史と人の活動」『植生史研究特別第2号』,
PP.49-82。
Keeley, L. H. 1977 The functions of paleolithic flint tools,
Scientific American, 237-5: 108-126.
Keeley, L. H. 1980 Experimental Determination of Stone Tool
Uses: A Microwear Analysis, University of Chicago Press.

Summary

The Fugusawa site is one of the representative archaeological sites dated to a period of the Jomon-Yayoi transition in the Shimokita Peninsula, Northern Honshu Island, Japan. It is located on a marine terrace formed during the OIS stage 5e facing to Mutsu Bay and its altitude is approximately from 20 m to 21 m. We have carried out archaeological excavations at this site since 2003 and discovered at least seven semi-subterranean residences. During a study season between 2003 and 2009, we investigated four semi-subterranean residences roughly dated to a period between the 4th century B.C.E. and the 3rd century B.C.E., two large pits, and 38 ordinary pits. The results of these excavations were published in 2012 (Takase ed. 2012). Here, we report the results of supplemental excavations conducted in 2010 and 2011.

The purposes of the 2010/11 campaigns are as follows:

- 1) According to preliminary excavations conducted in 2003, a buried river or a cluster of pit dwelling could be seen in the western part of the site. We aim to make sure the existence of artificial archaeological features in this area.
- 2) To grasp the plan view and the size of the semi-subterranean residences Nos. 5 and 7.

As a result of field investigation, we discovered a buried river in the western area, but there was no pit dwelling around it. The depth of the buried river was about 85 cm and the width was approximately 10 m at a maximum. This small river should be regarded as the western border of this site, although the formation date of the river has not yet been revealed.

The shape of the semi-subterranean residence No.5 is oval, and its long axis is longer than 8 m. No hearth was found, but a groove along the wall of the residence could be detected in a trench. Even though the diameter of the semi-subterranean No.7 was estimated to be 7 m and over, a groove along the wall could not be discovered. Plan view of the residence was also unknown due to the narrowness of the

excavation area.

Through excavations of these residences, we found pottery fragments that were dated to the Jomon-Yayoi transition, and the residence was also dated to this period. Twenty-five chipped stone tools were collected, and five pebble stone tools were also discovered. Result of the lithic use-wear analysis indicated that two side-scrapers was used for hide-working and plant-working, an informal utilized flake was estimated to have been used for wood-working. Five polygonum seeds were recovered from the fill of the semi-subterranean No.5 by the water-flotation technique. However, we could find no cultivated grains from this site. This result is consistent with the understandings derived from 2003-2009 excavations. Although paddy farming was begun in the Tsugaru Plain in this period, there is no clear evidence showing the cultivation and utilization of rice and millets in the Shimokita Peninsula.

On the contrary, there are many common characteristics in artifacts such as pottery and stone tools, pit dwellings, and the burial practice among these regions. This suggests that Yayoi society in Northern Japan should be regarded as a combination of subregions of farmers and hunter-gatherers.

写真图版



1 包蔵地西側谷地形セクション (2010年)



2 第5号竪穴住居跡調査終了時 (2010年)



3 第5号竪穴住居跡セクション (2010年, 東南→西北, C-D)



1 第5号竪穴住居跡セクション(1) (2010年, 東南→西北, E-F)



2 第5号竪穴住居跡セクション(2) (2010年, 西南→東北, A-B 南側)



3 第5号竪穴住居跡セクション(3) (2010年, 西南→東北), A-B 北側



4 包蔵地西側トレンチ調査終了時, 第7号竪穴住居跡 (2010年)



5 第7号竪穴住居跡セクション(1) (2010年, 12ライン)



6 第7号竪穴住居跡セクション(2) (2010年, 12ライン)



1 包蔵地西側トレンチ作業風景 (2010年)



2 包蔵地西側トレンチ検出遺構 (2010年)



3 包蔵地西側トレンチ作業風景 (2010年)



4 包蔵地西側トレンチ調査終了時 (2010年)



5 第5号竪穴住居跡調査風景 (2010年)



6 第5号竪穴住居跡北側調査用トレンチ調査風景 (2011年)

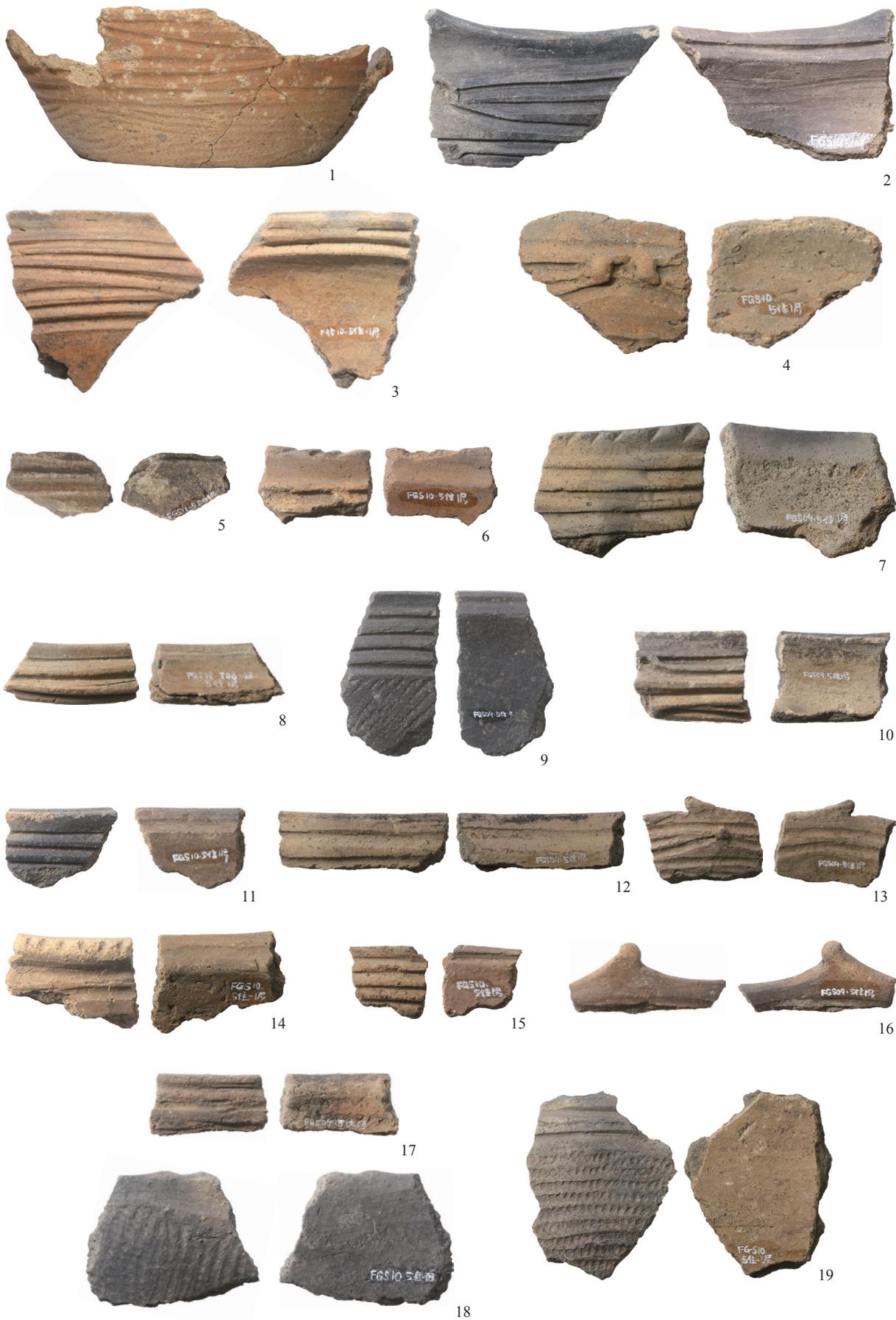


7 第5号竪穴住居跡 pp4 (左), pp5 (右) (2011年)



8 包蔵地西側トレンチ掘削状況 (2010年)

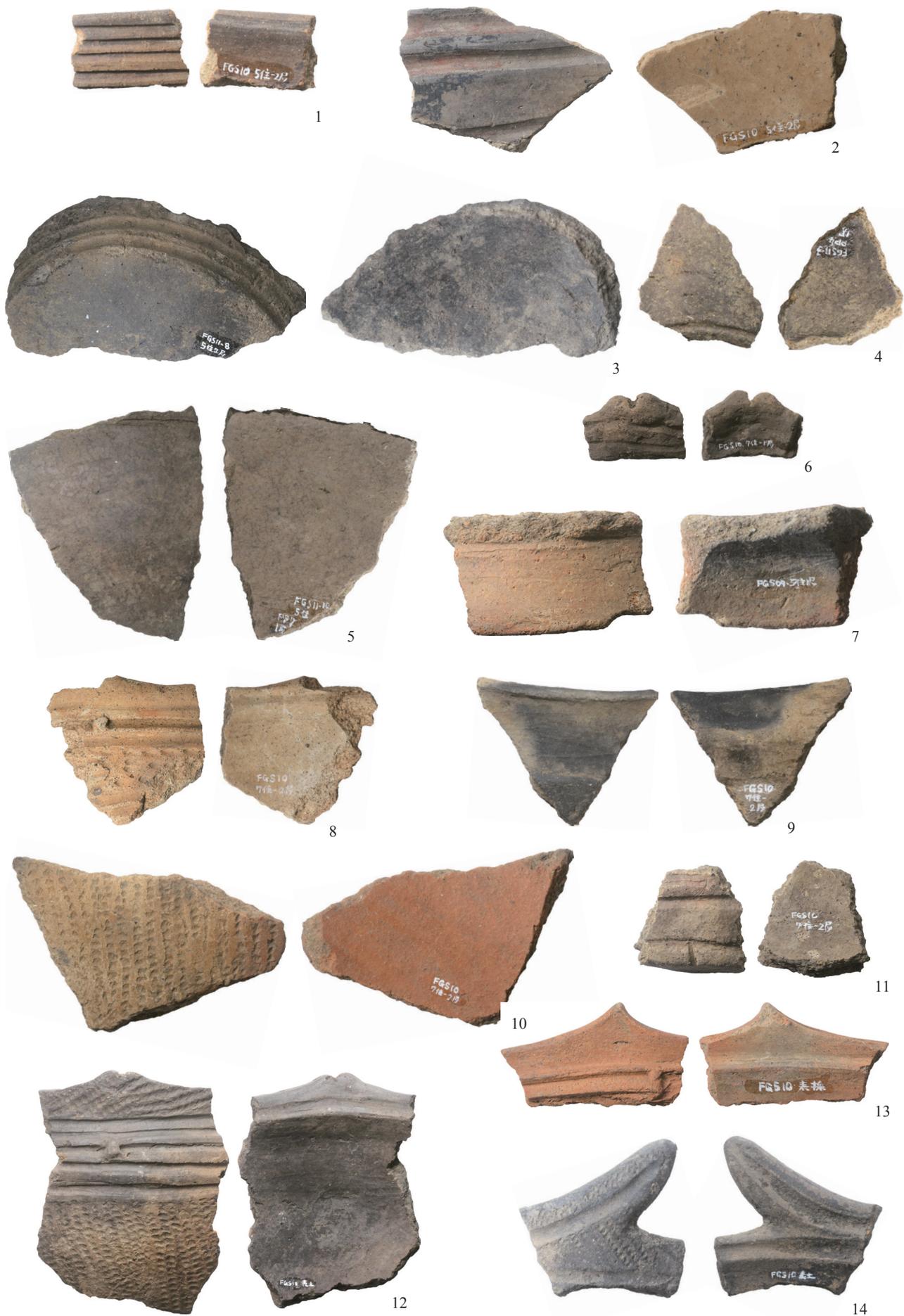
写真図版 4



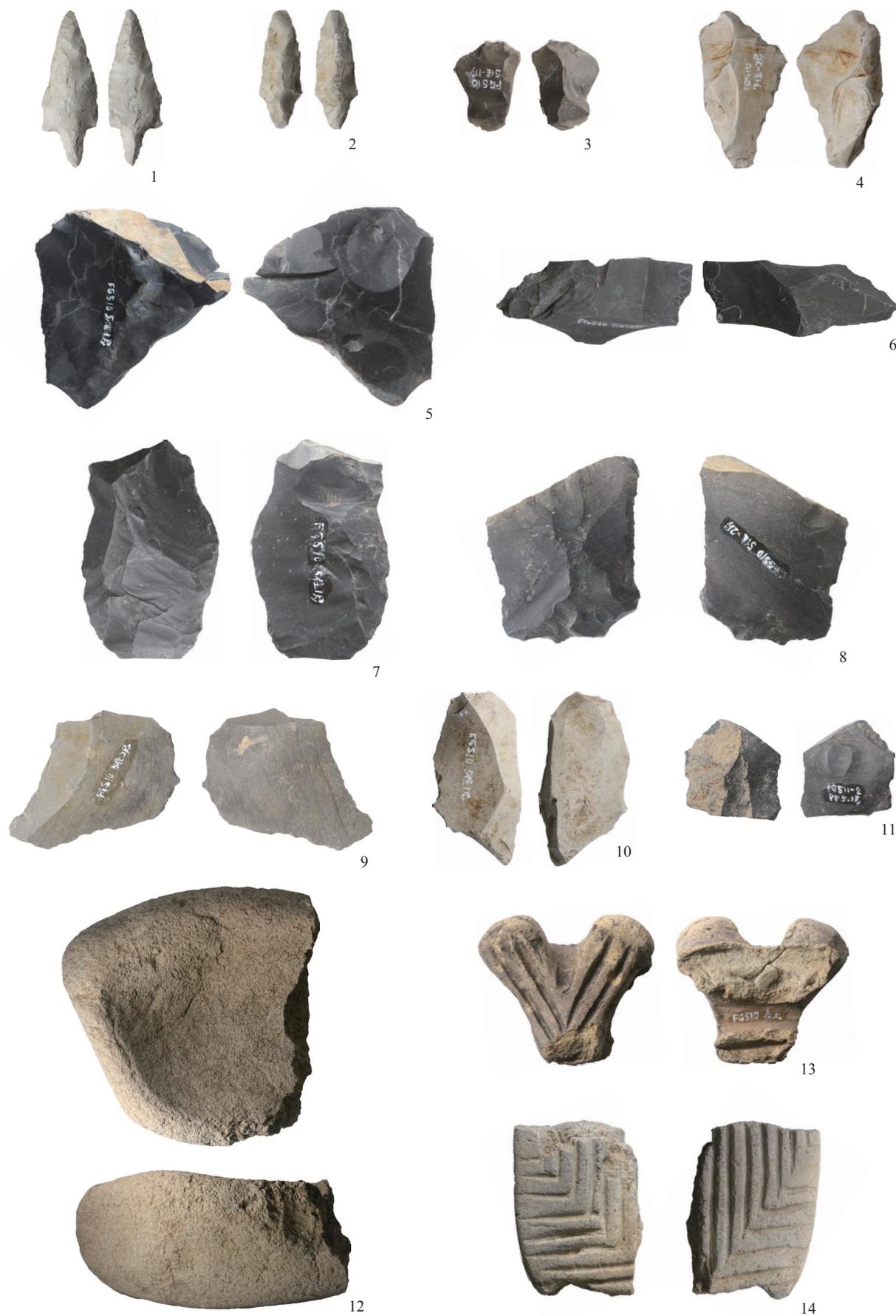
第 5 号竖穴住居跡出土土器 (1-19: 1 層)



第5号竖穴住居跡出土土器 (1-6: 1層, 7: 床面, 8-10: 2層)



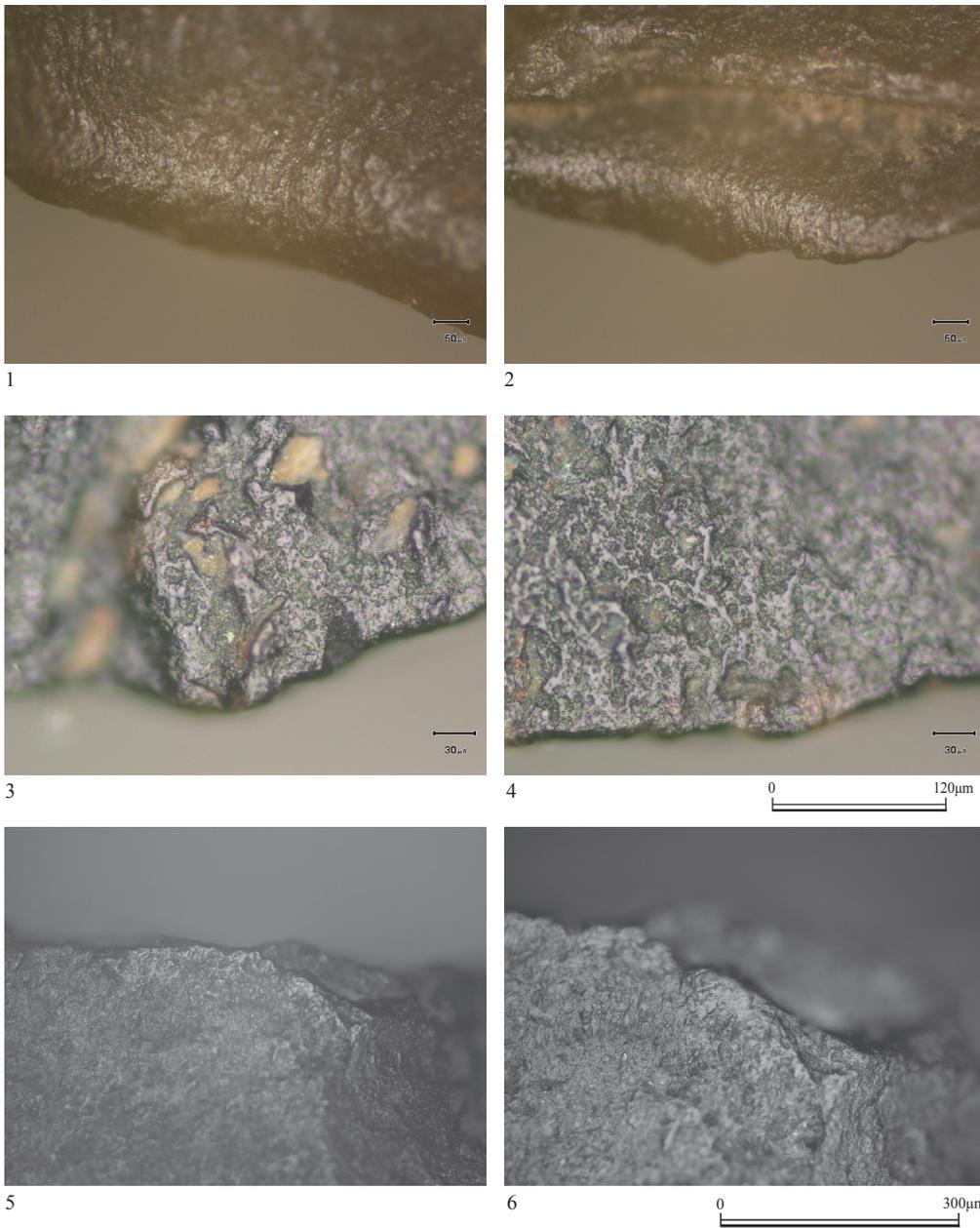
第5号竪穴住居跡出土土器 (1-3:2層, 4:pp4-1層, 5:pp7-1層), 第7号住居跡出土土器 (6・7:1層, 8-11:2層), 表土 (1層) 出土土器 (12-14)



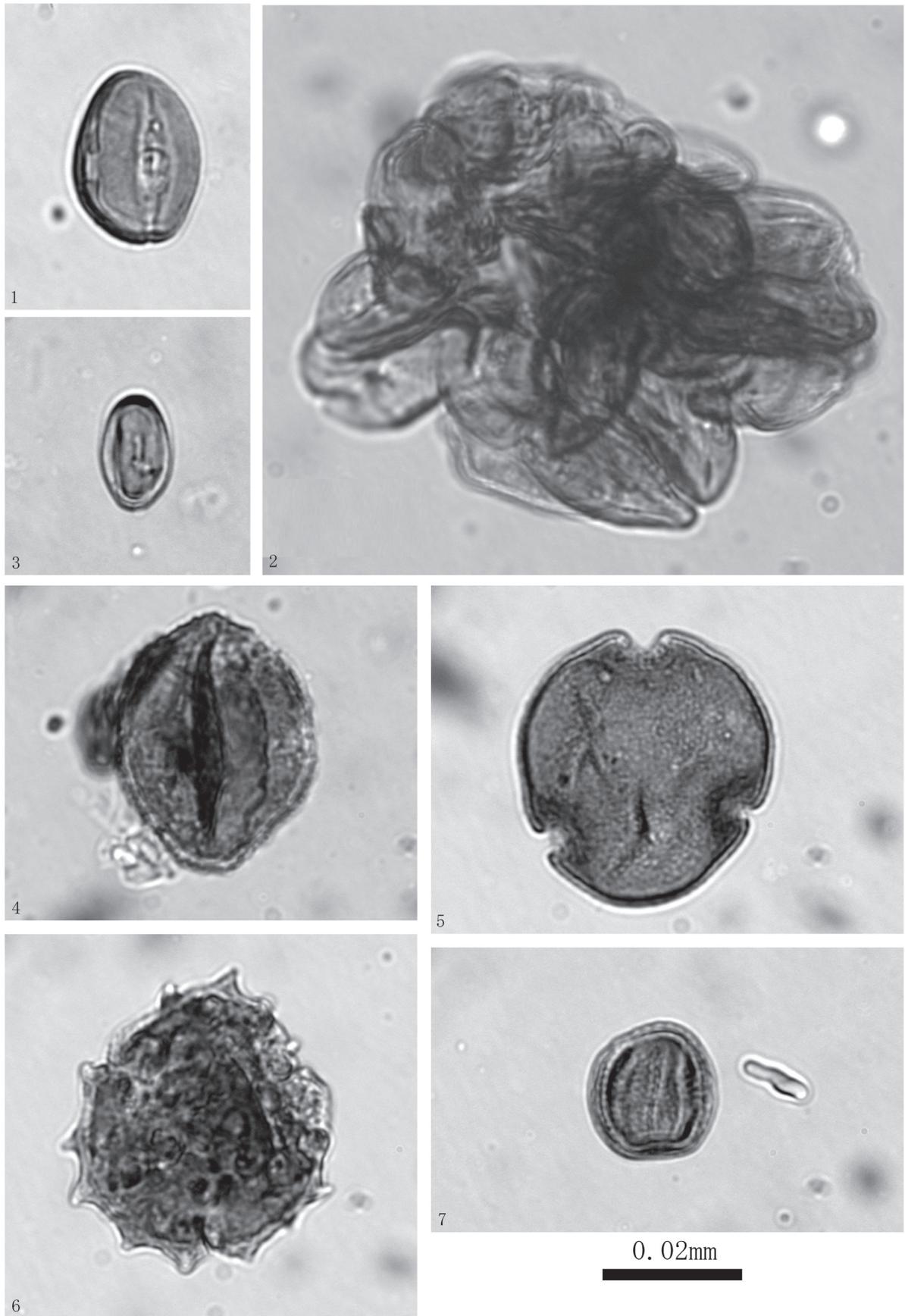
出土石器・土製品 (1-3・5・7・10・12: 第5号竪穴住居跡1層, 6・8・9: 第5号竪穴住居跡2層, 11: 第5号竪穴住居跡 pp5-1層, 4: 第7号住居跡2層, 13・14: 表土 (1層))



1 第5号竪穴住居跡2層出土種子(2010年)



2 使用痕光沢面の顕微鏡写真



江豚沢遺跡から産出した花粉化石

1. トチノキ属 (No.1 PLC.1736), 2. トチノキ属花粉塊 (No.2 PLC.1737), 3. クリ属 (No.2 PLC.1738), 4. コナラ属コナラ亜属 (No.2 PLC.1739), 5. シナノキ属 (No.2 PLC.1740), 6. キク亜科 (No.1 PLC.1741), 7. ヨモギ属 (No.2 PLC.1742)

報告書抄録								
ふりがな	あおもりけんむつし ふぐさわいせき に							
書名	青森県むつ市 江豚沢遺跡Ⅱ							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	高瀬克範, 大坂 拓, 森 将志 (執筆順)							
編集者名	高瀬克範							
編集機関	江豚沢遺跡調査グループ							
所在地	060-0810 札幌市北区北 10 条西 7 丁目 北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座内							
発行年月日	2016 (平成 28) 年 3 月 31 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
江豚沢遺跡	むつ市奥内字竹立 4-1	08	055	41 度	141 度	2010 9/6 ～ 9/14	約 87m ²	学術調査
				11 分	16 分	2011 8/9 ～ 8/16		
				16 秒	32 秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
江豚沢遺跡	集落址	縄文文化晩期	竪穴住居跡	土器				
		大洞 A 期	土坑	石器				
		～		土製品				
		弥生文化前期						
要約	2003～2009年に実施した発掘調査後の小規模な補足調査を、2010・2011年に実施した。包蔵地西部で浅い谷地形を確認し、くわえて縄文文化晩期後葉～弥生文化前期にかけての竪穴住居跡の規模を確認した。第5号竪穴住居跡は、不整楕円形のプランで直径は8m以上になると推定された。第7号住居跡のプランは調査面積が狭いため不明であるが、直径は少なくとも7m以上あることが判明した。							

江豚沢Ⅱ

高瀬克範編

江豚沢遺跡調査グループ発行

〒060-0810 札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学大学院文学研究科北方文化論講座内（代表：高瀬克範）

2016年3月25日印刷

2016年3月31日発行
